

---

# 愛しているから、苦しめたい

みかんしゃ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛しているから、苦しめたい

### 【Zコード】

Z9193E

### 【作者名】

みかんしゃ

### 【あらすじ】

綾人は柑菜を愛している。彼女なしでは生きていけない。それは陳腐な比喩や誇張でなく、厳然たる事実である。柑菜も同義だ。付き合つて十年。彼らの生活は再び脅かされる。七年前の事件と酷似する獵奇殺人。それと同じくして、綾人に接触する七年前に消えた男。おかげで幼年期から続く、こめかみの鈍痛はさらにひどくなる。鈍痛に苛まれながらも、犯人を追う綾人。その先には彼女が求める愛の形があった。

## プロローグ 愛の飢餓（前書き）

ハジメマシテ。この文章の表現は非常に幼稚で、文法等の正式な形を理解していない作者がヒョウしています。誤字脱字等は暖かい慈悲の心で助言してやって下さい。

自分なりには解ける謎を作つたつもりデス。しかたねーな解いてやんよといつ、稀有な読者様がいれば嬉しいデス。

ちなみに僕的には恋愛小説ですが、友人に否定されたのでその他にしましたw

## プロローグ 愛の飢餓

愛に固定の觀念を当てはめる。それは人類が紀元以来、永遠に続けている最大の過ちである。故に何人たりとも、私の愛を否定する事はできないのだ。

ネギーミ・ソウ談（人肉美食家として幼女7人を食す）

三ヶ月ぶりの再会だつた。十年の付き合いだが三ヶ月も会わない時期は一度もなかつた。あまりの淋しさに彼女は何度も再会を試みた。会えない距離ではない。彼は都内のホテルに三ヶ月暮らしていた。夏のボーナスはそれに消えた。彼女の求めを彼は全て断つた。彼女が以前に望んだからだ。矛盾ではあるが、全ては彼女の望み通りだつた。彼は彼女の望む全てを叶えようとしていた。

会えない欲求から解放されると彼女は素直に行動した。それのせいか、まだ昼だというのに、待ち合わせも早々にホテルへ直行した。彼を迎えて来た彼女には、一人の部屋に戻る時間すら耐えられなかつたのだ。

部屋は質素な作りだつた。狭い部屋には、ヤニで少し汚れた壁紙に小さな窓。旧型のテレビに一世代前のゲーム器が備えられている。ダブルベットだが大柄な綾人アヤトには狭く感じる大きさだ。安いホテルなので仕方はないが、質素すぎる部屋は綾人を少し不快にした。だが彼女には関係はない。愛を確認するには装飾など不需要だつた。彼女は部屋に入ると部屋の内容など見る暇もなく綾人に抱きついた。

「愛してる」

柑菜は一言、そう言つた。そして綾人の唇に吸い付いた。乱暴に情熱的に。愛を吐き出すかの様に。立つたまま綾人のスースを脱がす。ネクタイを外し、シャツを脱がす。柑菜は一連の動作に手慣れている筈だったが、ボタンを外すところで手間取つた。呼吸が乱れる。手先への神経伝達が思わしくない。爆発する感情は柑菜の手先を狂わせた。

普段の彼女を知る者に、この姿は想像できないだろう。

モデルを思わせる体型に、若い頃から気品を兼ね備え、艶のある黒髪を肩まで伸ばし、大きく整つた一重。その瞳は全てを飲み込むような美しい漆黒だった。仕事も常に第一線で活躍し、同期の男達を追いやる様に出世。同性は彼女に憧れ、異性は彼女の魅力に捕われた。三十代を迎えるも美しさに陰りが見える事もなく、刻んだ年に比例して艶と気品は研かれた。誰もが認める彼女の、この妖艶な姿を、誰が想像できるだろうか。

「愛してる」

先程以上に強く言うと、綾人をベットに押し倒した。さらに乱暴に唇を犯し、片手でスカートを脱ぎ、片手は綾人のズボンを下ろした。

綾人も柑菜を愛していた。柑菜の接吻にも綾人は情熱で返した。体の全てで柑菜を愛したいと思っている。だが、彼にはそれ以上の行為は苦痛でしかなかつた。

「俺も愛してるよ

事実を述べた。綾人は確実に柑菜無しでは生きてはいけない。比喩でも誇張でもなく厳然たる事実だった。

こめかみに小さな鈍痛を感じた。

柑菜は綾人に頭痛が起るのもわかつっていた。だが、それを知りつつも行為を続ける。愛されあれば全て乗り越えられると信じてやまないからだ。下着越しに愛撫を始めた。

「柑菜。もう止めよう。ここまでにしよう」

柑菜の愛撫する手を握った。柑菜の答えを解りつつも、言わざるをえなかつた。

「どうして？愛してるのよ、綾人。愛したいのよ

こめかみに鈍痛が襲う。先程より、やや強めに。

柑菜は慣れた手つきで下着を下ろし、綾人自身を握る。

「俺も愛してるさ。誰よりも柑菜を愛してる。だからもう止めよう

その言葉を聞きつつも柑菜は綾人自身をきつく握り離さない。少しずつ上下運動を開始した。

こめかみに鈍痛が襲う。先程より、さらに強く。

「三ヶ月も会うの我慢したの。私、気が狂いそうだった。綾人も同じでしょ？私を愛してるんでしょ？なら今回こそ、大丈夫よ」

そう言うと綾人の股間に顔を埋めた。柑菜は全ての愛を口内に込め、綾人を包み込んだ。その行為に感情は昂ぶり、柑菜は自らを慰め始めた。

こめかみに鈍痛が襲う。痛みは、よりひどくなつた。

柑菜は全てにおいて一流だった。行為もそれと同義だ。

「…柑菜。駄目なんだ。今はまだ駄目なんだ。」

綾人は誰よりも愛している柑菜の、一流の行為でも駄目なのだ。体は反応しない。心と体の接触が悪すぎた。彼は不能者だった。一向に性器は反応しなかつた。

柑菜は反応しない綾人自身を何時までも愛し続けた。一時間、一時間経つた。柑菜は何度も自ら果てた。

こめかみに鈍痛が襲う。まるで金属で殴られたかの様に。

綾人の限界が訪れる前に柑菜に限界が来た。

「どうして…？どうして勃たないの…？やっぱり綾人は私を愛してないのよ…」

柑菜は綾人の胸を殴る。爪で引っ搔く。搔き鬯る。肉を抉る。血が

溢れる。

「俺は柑菜を愛してるよ。だが病気なんだ。わかってくれ」

「わかるわけないよ！愛してるなら病気なんて消してよ！」

こめかみに鈍痛が襲う。断続的ではなくなった。痛みは更に強くなる。その痛みは視界を奪い、感覚を奪い始めた。

さすがに限界だった。綾人は頭を抱える。抱えた所で痛みは消えない。激しい鈍痛が綾人の意識を鈍重にさせていた。

「・・・綾人。頭痛なの・・・？」

柑菜の声で意識を取り戻す。

「く、くす…り。スーツの、内側…」

柑菜は綾人の言葉に立ち上がり、ベット下に乱れ散乱するスーツから赤い小瓶を取り出す。

「綾人！？一錠しかないわよ！」

誤算だった。暫らく必要としてなかつたから薬の補充を疎かにしてしまった。

「とりあえず一錠でも飲んで！」

柑菜は綾人の口をこじ開け薬を押し込む。綾人は唾液で流し込む。

速効性の高いこの薬は、鈍痛を和らげる。しかし、いかんせん適量ではない。意識ははつきりするが痛みは続いた。

「綾人！資料は！？」

そう。綾人の“薬”は一つじゃない。

「か、かば…ん」

柑菜は再びベットから飛び降り、鞄を漁る。鞄から何枚かの紙を取り出した。

“江戸川区船堀、婦女暴行監禁事件”

そう記された物を綾人の目の前に広げる。記された様々な文字の羅列が綾人の網膜から脳へと伝達された。

鈍痛に変化が訪れる。胸に熱を覚えた。熱はやがて、高熱になり、灼熱へ変わった。怒張し、噴出した。熱の正体は憤怒であった。鈍痛は憤怒へと形を変えた。

やがて憤怒が全てを包み、鈍痛を塗り潰した。

「綾人…大丈夫？」

柑菜が漆黒の美しい瞳に涙を溜めて聞いた。綾人は話すまで回復はできなかつたが、作り笑顔はできた。柑菜はそれを見て、瞳に溜めた涙と嗚咽を吐き出した。

「ごめんなさい。嫌いにならないで。ごめんなさい。嫌いにならないで」

一言を繰り返した。幾度も幾度も繰り返した。

大丈夫だよ、俺は柑菜を愛してる、嫌いになんかならないよ。

言葉は出なかつたが、心で繰り返した。柑菜が泣きじゃくり、疲れ果てるまで。

それは約三時間続いた。綾人は安心した。今日は早いほうだ。

静かな寝息を立て、柑菜は綾人の胸で寝た。綾人は柑菜の艶のある黒髪を解し撫でた。そして優しく柑菜を抱き締める。

一人の愛の飢餓は噛み合つ事なく太陽は沈んでいった。

## 第一話 医者

綾人は車で行きつけの病院に向かった。何時もの如く、出掛ける前に柑菜が駄々をこねた。

「なんで出掛けるの？私を置いて行くのね。私を愛していないのね。」

理不尽かつ不条理な言葉が綾人に浴びせられる。それを予測済みの綾人は、一時間前に家を出れば間に合うところを、一時間前に出ようとしていた。柑菜の事を綾人は理解している。何時ものことだ。

靖国通りを車で進み、喧騒溢れる新宿へ向かう。朝の混雑も折り込み済みなので特に焦ることはなかつた。

明治通りに周辺に近付くと、左折し裏道を走る。新宿の片隅に喧騒から離れた病院がある。受け付けを済ませ待合室に入つた。

薬が欲しかつた。幼年より偏頭痛に悩まされていたが、十年前に薬を代え、『例外』を除き安定していた。だが、十年目にして、またも激しい頭痛が襲つてくるとは思つてなかつたのだ。今は錠剤の薬と、資料の薬の併用で平静を保てるが、浅い鈍痛は続いた。今すぐ解放されたい。薬が欲しかつた。

「南さん。南綾人さん。三番外来室へどうぞ。」

院内アナウンスを聞き、指示された場所へ向かう。部屋に入ると白衣の長髪の男が背を向け座つていた。肩まで伸びた髪の毛を一つにまとめている。

「南さん。お久しぶりですね。今日はどうしました？」

医者は椅子を回転させて振り向き、足を組んだ。縁のない眼鏡をつけていた。中年で医者とは思えない不健康な痩せ細った気味の悪い顔をしていた。医者は空いている椅子に手を差し伸べ、綾人に座らせた。

「頭痛で意識が消えそうになつた。視界と触覚はほぼ消えた。」

医者は鼻まで落ちた眼鏡をかけ直す。

「それは…七年前と同じ感覚ですか？記憶は飛びましたか？」

「いや、あの時に比べればまだマシだった。先生、頼むよ。あの薬をまたくれ。今も痛むんだ。」

医者は机を向きペンを持った。

「まずは診察ですよ。今は何が原因ですか？」

「白菜とセックスしようとしたからだ。」

綾人は臆面もなく答えた。医者はペンを走らす。

「ほう。それは病に改善が見られたからですか？」

綾人は少し前屈みになり、手を膝に置いて答えた。

「いや、三ヶ月会わなかつたからだ。」

医者はペンを止め、顔を上げて綾人を見た。

「本当にですか？ 柑菜さんは承知したんですか？」

「いや、柑菜が言い出したことだ。」

椅子を綾人に向け直し、また足を組んだ。

「話が見えてきませんね。柑菜さんの目的は何だったんですか？」

「本で見たらしい。ショック療法ってやつさ。柑菜はそれで俺の病気が治ると思ってたんだ。」

医者は深いため息をする。

「なんて安易な…。その本に素人は真似しないようにと書いてなかつたのですか？」

「書いてない本があると思うつか？」

さらに深いため息をした。眼鏡はまた鼻先まで落ちる。

「全て了承済みだったということですか？」

「勿論だ」

もつため息は出なかつた。

「理解できませんね。南さん、死ぬ気だったんですか？」

「俺は柑菜の望みを叶えたいだけだ」

医者は眼鏡を外し、綾人の顔を覗きこんだ。浅い皺のできた口元を手でさする。

「その様子だと、どうやらカウンセリングは受けていないみたいですね」

「ああ。いくら話しても通じないからな。頭痛もほぼなかつたし、薬も足りてたからな」

医者は机に向き、ペンを走らす。

「薬は出しましょう。痛みが引くと同時に強い眠気も来るので、運転中は控えるように。速効性は抜群です。」

「ありがとうございます、先生。助かるよ」

綾人は小さく笑った。だが、医者は綾人を見ず、ペンを走らせながら答えた。

「ただし、薬は三日分のみです」

綾人は少なからず驚いた。姿勢を直し、医者に聞く。

「何故だ? また一週間分くれよ。忙しいのは知ってるだろ?」

医者は椅子を回転させ、綾人と向かいあつた。そして笑顔を作つた。

「三日後にカウンセリングを行います。その時にまた三日分の薬を渡しましょう。これ以上は言わなくてもわかりますね？」

「交換条件か。薬が欲しけりやカウンセリングを受けると？」

「ええ。勿論、わかっていると思いますが、病院を変えたところで薬はくれませんよ？この薬は私が開発した新薬ですから。それに南さん、入院はしたくないはずだ」

綾人は医者の言いぶりに、笑ってしまった。

「患者に脅しか。あんた、イカれてるな」

医者は歯を出して笑う。

「精神科の医者は皆、大なり小なりイカれてますからね」

綾人も歯を出して笑ってしまった。

「わかつたよ。降参だ。カウンセリング受けるよ。」

それを見て医者はカルテにペンを走らせる。

「それでは、仕事終わりにでも来て下さい。お待ちしますよ。」

綾人は軽く頭を下げ、立ち上がり部屋を出ようとした。しかし扉を開ける前に振り返り医者に言つた。

「あ、先生。わかつてるとと思うけど、愛の講義だけはやめてくれよ。俺には俺の愛の形があるんだからな」

医者は椅子を回し、眼鏡をかけた。そして背にもたれかかり不遜な態度で答えた。

「ええ。勿論わかつてますよ。もう眼鏡は壊されたくないませんからね」

それを聞き、綾人は部屋を出た。

## 第一話 鷹司

一時間弱をかけ自宅に帰宅した。一人の家は江戸川区の船堀にある。付き合つて半年で借りた家なので九年半の年月を刻み、外観は幾分廃れた。

「おかえりなさい、綾人」

メールで綾人の帰り時刻を聞いた柑菜はすでに玄関前に待ち受けていた。そして柑菜は綾人を満面の笑顔で出迎えた。

「ただいま」

その笑顔につられ、綾人も笑顔になる。二人のここまで笑顔は誰も見たことがないだろう。

軽くキスをして部屋に入る。1Kの小さな物件だが、一人には充分な広さの部屋だ。家には風呂に寝食さえできればいい。家は休息で使うわけではない。愛を確かめるのみに必要なだけだから。

まだ昼すぎだが、スーツから寝巻に着替える。柑菜はすでに寝巻だ。

二人の休日の使い方はいたつてシンプルだ。

ベットで抱き合つ。キスをする。日々、起きたことを話す。キスをする。食事や風呂以外は必ずベットで過ごす。九年半で変わったことはキスの続きにセックスがなくなつただけだ。

時折、休日中に仕事場から電話が来ることがある。それ以外の電話

は鳴らない。一人は共に友人はいない。必要のない存在だからだ。万が一、電話が鳴つても柑菜は一切取らない。仕事場で一流の働きをする彼女に物を言える人間はいなかつた。それは徹底されており、もし電話すれば出勤時に柑菜にひどく絞られる。同棲当初は、それを承知済みでも仕事場の急務の場合、電話は鳴つたが、柑菜は一切出ず、翌日に何時も通り電話した者を絞つた。

綾人は一人のみ電話を受けるが、その他は一切取らなかつた。共に、二人の時間を邪魔されたくないからだ。誰しも恋人との時間を邪魔されるのを快く思わないだろう。それが一人には極端なだけだ。

それでも唯一の例外が綾人にある、一人の存在だ。ただ一人のみ、電話に出る。

それは柑菜も了承してくれた。何故なら一人に、重要な情報だからだ。

だがこの七年間、電話は鳴ることはなかつた。

二人は残り一日の休日を、何時も通り過ごした。やがて零時を回り柑菜が眠りにつくと、綾人はベットから出た。薬を飲む為だ。

病院で貰つた薬袋から薬を取り出し、赤い小瓶に移し替える。赤い小瓶は勿論、柑菜からの贈り物だ。必要最低限の家具もスーツも車も、綾人の身の回りの全ては柑菜からの贈り物である。綾人は柑菜に満たされ幸福を感じて止まなかつた。

無地のコップに水道水を入れ、薬を出す。薬袋の表記に適量が二錠と記載されていた。薬の量が変わつていたので、いささか疑念を感じていた。薬の量が変わつていたので、いささか疑念を感じた。

じたが、改良された新薬ですよ、と医者が表記に付け加えていたので、疑念は解消された。

薬を水道水で流し込む。浅く続いた頭痛は完全に消え去った。かなりの速効性だ。綾人はベットに戻り、寝る準備をする。その時だつた。

綾人の携帯が震えた。

とりあえず携帯を取り、誰からの着信か見る。着信主は非通知であつた。

綾人は電話番号を仕事場にしか教えてない。仕事場の人間が、綾人に非通知で連絡する必要がどこにある?不可思議な事実を解消する為、電話に出ることにした。幸い、柑菜は未だ眠っている。ベットから出て、小さなベランダに行つてから通話ボタンを押す。

「誰だ」

『やあ、綾人。久しぶりだね』

若い男の声だ。陽気に話す男は久しぶりだと言う。綾人に心当たりはなかつた。

「誰だ。何故、番号を知つている

『理由なんかどうでもいいじゃないか』

ケラケラと笑いを交え、男は答えた。不愉快だった。

「悪戯なら切るぞ」

不愉快さを隠さず、怒氣を交え答えた。

『本当にわからないみたいだね。君の脳は本当に便利だ』

理解できない。何なんだこの男は？ただのイカレた男か？綾人はもう答える気もなく、電話を切ろうとした。

『まあ、待てよ。柑菜ちゃんは元氣かい？柑菜ちゃんにも久しぶりに会いたいな』

その言葉に綾人は反応した。

「貴様、何故柑菜を知ってる？」

綾人は思考を回転させる。この男は柑菜に以前に会っている。そして自分にも。そして番号を知っている。不可解だ。一人に共通の知人はいない。仕事場以外、二人の番号を知る者はいないし、友人もいない。二人の愛の確認の邪魔をする電話を、二人は仕事場以外教えない。それは徹底されている。やはり不可解だった。

「答える」

綾人はさらに怒氣を加え聞く。

『まだわかんないの？あんなに苦しめたのに忘れちゃった？』

男の言葉に綾人の心臓が鳴った。鼓動が毎々に高鳴りだす。何故、高鳴る？綾人は感情の変化を理解できない。

『綾人。君も素敵だつたよ？最高の快感だつた！君を！犯すのはね！』

綾人の脳、脊髄、そして全神経に雷光が走つた。

『てめええ！！鷹司か！？』

綾人は吠えた。胸に灼熱を感じる。灼熱の正体は憤怒だ。憤怒が踊り狂い、血液が沸騰したかのような錯覚を覚える。しかし、不思議と気分は悪くない。むしろ高揚していた。

『あははは！思い出してくれた？僕の声を忘れるなんてひどいじゃないか』、綾人。七年ぶりだね！』

ケラケラと鷹司タカシと呼ばれた男は笑つた。

「何処だ！？何処にいる！？今すぐ殺してやるよおお！」

携帯を握る握力が強まる。綾人が喋る度に、口からは大量の唾液が飛ぶ。

『あははは！堪らない！堪らないよ綾人！やっぱりまた会いに行くよー待つてね！』

そう言うと男は電話を切つた。

携帯を握る手が震える。夜空に叫びたくなる欲望を抑えるのに必死だ。歯を軋り、唇を噛む。あまりの力に歯茎と唇から出血していた。憤怒が綾人を包む。

だが、彼の表情に憤怒は映つていなかつた。口元は妖しく歪み、肩が小刻みに震わせる。綾人の表情には憤怒と反対の感情が表れていた。

表情と震えの意味は“歓喜”だ。

その瞬間だつた。強烈な睡魔が綾人に襲いかかつてきた。

「な……なんだ……？」

突然の睡魔に戸惑う暇はなかつた。理解する間もなく、意識が朦朧としてくる。うまく立てない。ベランダの柵にもたれかかる。

「…痛みが引くと同時に強い眠気も來るので…速効性は抜群です…」

医者の言葉が蘇る。強烈な睡魔は先程飲んだ薬の効果か。慣れ狂う憤怒を抑えつける程の強烈な睡魔だつた。

「く、く…そ」

薬の効果は絶大だつた。みるみる内に憤怒を抑えつける。睡魔は更に巨大になり、綾人の強固な憤怒と意識すら奪いさる。

綾人は最後の気力を振り絞り、着信履歴を消そうとした。翌日、必ず柑菜に非通知の件を聞かれる。柑菜に余計な情報を与えられない。柑菜の憤怒は綾人のそれとは違い、更なる狂気と狂喜を交えているからだ。

ベランダの冷えた床に倒れ、意識が消えかかる一瞬前に着信履歴を消した。

肌に冷たい風を感じる。耳元には雀の鳴き声が聞こえる。強い寒気を感じ綾人は目覚めた。

空にはすでに太陽が顔を出し始めていた。目の前に広がる景色である程度の時間を察した。部屋に戻らなければ。綾人は立ち上がりベランダの窓に手をかけよつとした。

その手は窓をつかむ事なく、窓にぶつかった。

強烈な虚脱感を感じる。体がだるいし、眠気もある。それに少し痛みを感じた。痛みの元は右手の甲にあった。拳部分に傷があった。意識が薄れ、倒れたときに擦り剥いたのだろうと綾人は思った。なんとか体を起こし、部屋に戻り時計を見る。時刻は五時。何時も通りの目覚めだ。五時起きは習慣だった。綾人は柑菜より遅く眠り、柑菜より早く目覚める。連日の五時起きだろうが、眠気も一切ない。愛の為せる習慣だった。今回は習慣に救われた。

習慣だったが、現在のような強烈な虚脱感は覚えがない。眠気からくるものではなさそうだ。昨夜はさすがに興奮していたからか。外で寝たせいで風邪もありえる。

とにかく柑菜が目覚める前に平静を取り戻さなければ。冷えた体と虚脱感を消す為、シャワーを浴びた。

体は暖まったが虚脱感は消えない。かなりだるかった。

シャワーを浴びながら綾人は考えた。昨夜の出来事を。歪む表情を誰が見るわけでもないのに、口元を手で覆つた。今日の仕事は事件の洗い直しだ。そう決めた。

浴室から出ると、柑菜が目覚めていた。

「おはよう、綾人」

少し寝癖をつけ、キッチンで料理をしている。

「おはよう、柑菜」

綾人は柑菜の姿を見て心に安らぎを得る。そして、安堵した。悟られていないと。

テーブルに柑菜の料理が並べられる。

「じめんね、今朝は少し手抜きよ」

言葉通り、手の込んだ料理ではない。パンにワインナー、目玉焼きのみだ。手抜きの意味は、このワインナーか。手でちぎつた様な切り口だ。完璧を愛す柑菜らしからぬ行動だった。

やがて出勤時間になると、何時も通り駄々をこねた。全て折り込み済みなので、勿論、出勤一時間前に対応した。

自宅から仕事場の小松川警察署までは車で十五分。予定通りの時刻に出社した。綾人は三階の刑事課に行く為、エレベーターのボタン

を押す。

「よひ。相変わらず時間に正確だな。初めての有給はどうだつた？」

綾人の背後から初老の男が話し掛けてきた。スーツにコート、茶色のハットを被り、片手には缶コーヒーを持っていた。

「最高の休暇でしたよ」

綾人は首だけ振り返り答えた。カカカツと初老の男は首を上げ笑つた。第一ボタンが空いたワイシャツから太い首が覗く。屈強さが伝わる体つきだ。そのすぐ後、エレベーターが一階に止まり、二人は中に入った。

二人は同じくエレベーター内の階数表示を見上げる。

「やっぱ三ヶ月ぶりの彼女はよかつたんか？」

綾人に気兼ねなく喋りかける人間はこの世に一人しかいない。それは柑菜と、この男。轟敦夫トドロキ アツオだ。定年間際の轟は、綾人の学生時代からの恩人であり、学生時代の保護観察者だった。綾人を非常に可愛がり、綾人もそれを快く受け入れていた。柑菜と二人だけの時に、電話を出る人物とは轟のことだった。

「それは勿論ですけどね。もつといいことがあつたんですよ」

階数表示は一階を過ぎ、二階に点灯した。

「なんだよ。柑菜ちゃんにまた何か貰つたか？」

エレベーターの扉が開き、綾人は先に出た。

「いえ、鷹司から電話が来ましてね」

轟は綾人に続いて出ようとしたが、足が止まってしまった。轟の時間がわずかに止まる。数秒経つと扉が閉まろうと動いた。扉の動きに我に帰り、扉を抑え綾人を追う。

「間違いねえんか？七年も消息摑めてねえんだぞ。何を今さら」

綾人は足を止め、体全体を振り向き轟に言った。

「間違える訳ないでしょ。七年間、探し続けた男なんだ」

綾人は素のままで言つた筈だった。だが轟には怒氣を感じた。平静を保つのに精いっぱいのが伝わってきた。

深い皺を刻んだ口元をさすり、残りの「コーヒーを音を立てて啜る。

「やれやれ。定年まで後少しなんだぞ。オレに迷惑かけるなよ」

そうぼやいてしまう。空き缶をゴミ箱に投げ入れた。だが、心中は決意で固められていた。

三階の刑事課にある自分の席に座つた。綾人以外の机は、書類や力ツプ麵に空き缶で埋め尽くされている。綾人の席は対照的に清潔感に溢れていた。

朝礼にはまだ時間がある。綾人は席に着くと有給中についたであろう埃を丁寧にタオルで拭く。パソコンも電話も。それは有給明けだから特別ということではなく、習慣だった。

だが、寝起きから続く虚脱感が綾人の手を鈍らせる。朝から回復することはなく、未だにだるかつた。

「疲れてんじやねえか？」

轟がコートを脱ぎながら綾人を気遣う。綾人の虚脱感は目に見えてわかるものではない。けだるさも動きには微細にしか出ていない。それでも感付くのは、轟の観察眼と綾人との長年の信頼関係の表れだった。

「轟さんに隠し事は無意味ですね。正直に話しますよ。一日前から頭痛がひどくなりましてね」

轟は綾人の隣の席に座る。その机は他の机を越える乱雑さだった。

「新しい薬を服用することになりましたね。効果は抜群ですが、強烈な眠気も付随されていて。鷹志との電話が終わると同時に眠つてしまつて。寝たところがベランダだったんですよ」

「てえことは風邪か？」

綾人は頷く。

「つたぐ。あのヤブ医者も懲りねえ野郎だ。そんな薬が認可される訳ねえだろうに」

「そんな事はどうでもいいんですよ。俺は頭痛が治まればいい。あちらは治したい。利害は一致している」

轟はため息をし、首をかしげる。

「まあいい。それより今は鷹司の件だ。内容を全て話せ」

「こめかみに鈍痛が襲う。限りなく微小だが。

「まず非通知で…」

その時だった。署内にけたたましいサイレンが鳴る。一人はスピーカーに耳を傾けた。

「警視庁より入電中。警視庁より入電中。江戸川区西葛西、江戸川河川敷にて二十代女性の遺体を発見。遺体は激しく損傷しており殺人事件の可能性。至急、現場に急行せよ」

轟はすかさず立ち上がり、コートを羽織り愛用のハットを被る。

綾人は体は反応するも、心は動こうとしない。未練がましく資料を見た。

「小僧。事件は何よりも優先しろ。それが捜査を続ける条件だったろ?忘れたわけじゃあるめえ」

轟の言葉で綾人の心も行動を促した。

「ええ。 わかつてますよ。」

綾人は資料を鞄にしまい、先を走る轟を追つた。

## 第四話 第一の惨殺

車で約二十分。江戸川河川敷に到着した。秋も半ばとはいえ、早朝の河川敷は少し冷えている。現場は高く鬱蒼と雑草が生い茂っていた。電灯も少なく人通りも少ない。殺人遺棄の条件は揃っていた。

目の前に団地がある為、野次馬でごった返している。野次馬を搔き分け、現場に向った。現場は一人よりも先に到着した捜査員達によって保存されていた。立入禁止のテープの前に立つと、強烈な臭いが鼻をついた。テープの外には何人かの制服警官が膝をついて口元を抑えている。それぞれの顔はまさに顔面蒼白だ。現場の異常さを示しているのか。

綾人らはハンカチを取り出し鼻を覆う。テープをくぐり遺体を覆うシートに向った。

二人は小さく両手を揃え、シートをめくつた。

「……なんてこつた」

当然の反応だった。全裸の人間“らしき”物体がシートの中に横たわっていた。

先に女性の遺体と言わなければ、此処に在る遺体を女性と判別できただろうか。

顔面が原型を留めていない。鼻、眼球は抉られ、その位置を奇妙に逆転させられている。首筋は深く切り込まれ、赤い肉に交じり白い

骨が見えていた。出血量もひどい。さらに前歯は全て折れ、口の中には乳房と思われる肉片が覗いていた。残った片乳房も原型がない。青紫に鬱血している。

手は後ろ手に回され手錠をされている。形状から見て安物の玩具か。全身には浅い傷跡が何ヶ所にも及んでいた。傷口からして鋭利な刃物で切り刻んだように見える。

「…」じりやあとんでもねえ変態野郎だな

轟が小さく呟いた。視線の先には女性の陰部がある。陰部からも大量の出血痕が見受けられた。激しい裂傷がある。陰部の裂傷の多くは強姦だ。

だが、これは単なる強姦殺人ではない。常軌を逸した犯行だ。ここまで惨殺死体は、轟の記憶にない。

こめかみに鈍痛が襲う。若干、痛みは強くなつた。

「小僧。おめえは下がつてろ」

轟は遺体に集中した意識下で綾人の変化を察した。そして瞬時に思考回転をさせる。現在の体調で綾人には酷かもしれない。

「いえ。大丈夫です」

綾人は視線を逸らすことなく、遺体を見続けた。気を強く持つている。それを見て、轟は綾人を未だ甘く見る自分に呆れた。

綾人の体調は確かに良くない。鈍痛は止みはしない。だが、それとこの倦怠感は関係するのか。虚脱感が全身を包み、吐き気がする。しかしこの遺体を見て確かに体調は悪化した。不可思議だった。

「ガイ者の身元は？」

何とか振り絞る様に綾人が聞く。今はそれどころではないのだから。抑え込め。

綾人の背後に立つ捜査員が手帳を読み上げる。

「被害者は近所に住む高橋直美、二十四歳。派遣社員。仕事場所は西葛西駅近く。身元は財布の中の免許で確認。血液の凝固具合から死後、五、六時間かと思われます」

「第一発見者は？」

轟は立ち上がり捜査員に聞く。

「近所の公園に住む、老人です。犬の散歩に訪れ、犬が草群に入つたところ遺体を発見、通報したそうです」

「衣服はどうしたんですかね？」

綾人は遺体から目を逸らさず聞く。

「江戸川の一キロ先の下流で発見しました」

轟は口元の深い皺を擦る。

「他に何か情報はあるか?」

「実家が目の前の団地です。この騒ぎで両親も先程、被害者の免許から身元を確認しました」

「そうか…『家族は何か言っていたか?』

「当然ですが、ひどく混乱しています。唯一の証言は昨夜、零時前に会社を出たと連絡を受けたそうです。他は満足な証言は得られませんでした」

轟は立ち上がり、愛用のハットのツバを持ち上げる。

「ふむ。手がかりは玩具の手錠のみか。まあこんだけ汚ねえ犯行だ。ボロは出でくんだろ。指紋調べりやいい。人、一人運んで捨ててんだ。目撃情報も期待できる。衣服や遺体から容疑者の体液や毛髪が残つていれば確定だな」

綾人は遺体にシートを被せて、再び両手を備えた。立ち上がり、思慮をめぐらす。

死亡推定が一時から三時…被害者の最後の連絡が零時前…となると、犯行時刻は零時後から一時までとなる。鷹志の電話は…?零時過ぎてからだつた…

「小僧。何考えてやがる」

綾人の思慮の巡りを寸断するように轟は聞いた。

「…鷹司の電話なんですが、零時過ぎなんですよ…」

轟は思考を回転させる。成る程。綾人への電話後に犯行すれば犯行時刻に重なる。綾人はそう考えたと、轟は悟る。

「馬鹿野郎。簡単に重ねるな。変態野郎はそこいらにいる。第一、鷹司もあの事件の容疑者の一人ではあるが、まだ確定したわけじゃねえ。偏った視点じゃ事件は解決しねえ。何度も教えてだらう」

「……ええ。そうでしたね」

綾人はそう言いながらも疑っていた。タイミングが良すぎる。変態はそこらにいる。だが、これだけイカレた野郎が区内に何人もいると思えない。鷹司の電話と異常な犯罪。綾人に以前の事件の重ねるなと言うには無理があった。

「まあ、とにかく検視結果を待つか。オレらは周辺の聞き込みだ。行くぞ、小僧」

轟は綾人を見ることなく、車に向つた。綾人は一度、シートに覆われた遺体を見てから轟を追つた。

## 第五話 検死結果・異常

同日。午後八時。綾人と轟は監察医務院に辿り着いていた。そろそろ検視結果が出る時刻だった。解剖室から老齢の人物が出てくる。

「どうよ、清じい？」

轟が聞くと清じいと呼ばれた男性は腰を叩く。低い身長はひどく曲がった腰でさらにはく見せていた。禿げ上がった額に汗を滲ませていた。

「ひどい犯行じやよ」

清じいは深くため息を吐くと解剖結果を話し始める。

「とりあえず死因は首筋の動脈からの出血死、ショック死じや。じやが…」

清じいはその後の言葉に一瞬詰まる。結果を報告する事に躊躇つた。

「じゃが、首筋の傷が一番新しい。意味がわかるか？」

二人は息を飲んだ。目玉を割り貫き、鼻を削ぎ、前歯を折る。それらが“生きていている状態”で行われたということだ。だが、人が耐えられる訳がない。痛みでショック死するはずだ。

「体内から大量のモルヒネに近い成分が検出された。これじゃあ痛みは感じぬわな」

二人は思わず顔をしかめる。想像を拒否したくなつた。

「痛みは感じぬともいえ、恐怖で失神するじゃ るう。じゃが脇に小さな火傷がある。恐らくスタンガンじゃ るう。始めは意識を失わせる為に使つたかと思つた」

清じいは額の汗を拭く。それは熱氣から来る汗ではなく、冷や汗や脂汗に類するものだつた。

「火傷は何ヶ所も発見できた。つまりは何発も電流を浴びせておる。火傷痕から推察すると、恐らく微弱な電流じゃ。これじゃあ意識は消えない。モルヒネを注入したとはいえ、電流の流れは感じる。むしろ意識はハツキリしてしまうじゃ るう」

轟は残虐性に苛立ち、舌打ちをした。これだけの非道な犯行に意識を失わない人間はいない。恐らく意識を失う度に電流を流し、意識を覚醒させていたのだろう。

「それらの犯行と同時に暴行しておる。性器内部の傷と顔面の傷は、ほぼ同時刻じゃ」

こめかみに鈍痛が襲う。痛みは弱さを無くし始めた。

清じいは疲労を隠さず、近くの椅子にコロコロと座る。

「それで、手がかりは？」

綾人は鈍痛を気にせず、話し掛ける。

「すまんが、なじじや」

轟は少し戸惑いながら聞く。

「おいおい。そりやねえよ、清じい。なんかあんだけ。これだけ汚ねえ犯行なんだぞ？指紋の一つぐらいでてきたら？」

清じいは轟に視線を合わせる。強い視線だ。

「汚い？ワシには恐ろしく冷徹な犯行に見えるわい。指紋は一切ない。手袋などをしていただろ。さらに性器には一切の体液も付いていない。ゴムを何重にもしてある。それでいて、女の体を舐めてもいなじやろ。唾液も見つからない。手首の手錠は被害者が暴れないようにするのもあるじやろ。だが、抵抗され、爪先に容疑者の皮膚か血が付着するのを恐れたのかもしれない。さらに死因の首筋の傷じや。乳首は切り離すのに何度も切っているのに、首筋の動脈を一発で迷いなく切つておる。証拠は残さず残虐性を極める。犯人は恐ろしい奴じやよ」

「…となると手錠も大量生産のものだろ」

轟には少し予想外だつた。変態野郎には違ひないが、ただの変態野郎じやない。

少し軌道修正が必要だつた。

「聞き込みの結果、何か怨みを買うような女でもねえ。目的が見えねえ。暴行目的なのか？怨恨やヤリたいだけとは考えられんな。」

「怨恨？」

轟の推理に清じいが割つて入る。

「怨恨の線はないな。この犯行には“感情”がない。とくに悪意等は皆無じや。」

「おいおい。これだけの犯行に悪意ない人間がいる訳ねえだろ」

「儂の感じた事……儂は検死医じや。現実しか見ぬ。物言わぬ死体は真実しから語らぬ。じゃが……あまりに陳腐な表現じやから使いたくはないが……この犯人は……」

清じいは頭を振る。脳裏に浮かんだ言葉を否定したいのか。だが決心して思いを放つた。

「……人間なのか？」

## 第六話 メッセージ

犯人は人間なのか？

陳腐な表現。確かにそうだ。人間以外なら怪物や靈の仕業だというのか？そんな低次元な発言など一人は一切受け入れないだろう。

だが、二人が知る清じいは飄々としてはいるが、検死には絶大の信頼を置いている。清じいの検死により、いくつもの事件の糸口が見つかっている。そして、くだらない表現をしないのも知っている。その清じいが、犯人は人間じゃないと言う。事件の深刻さが集約されていた。

「四十数年、死体を切り刻んできた。その死体達は何らかの感情が見え隠れしておる。怨恨、嫉妬、絶大な殺意。例えひた隠そうとしても、必ず“悪意”は隠せぬものじゃ。じゃが、この死体には何も見えぬ。これだけの残虐な犯行に“感情”が見えぬのじゃ。“感情”の見えぬ生物。儂には、とても人間の犯行には見えぬ」

清じいは頭を抱える。ひどい葛藤があるに違いない。長年に培われた経験が一切通用しない。だが、感じた情報はある。それは自身の辞書には書かれていない、陳腐な表現でしか表せない代物だった。仕事に誇り持つ男には屈辱でしかない。

「確かに陳腐ですね。それでいて稚拙だ」

綾人は沈む清じいなど一切介さず、否定した。

「おい、言葉選べ」

轟が綾人に少しきつめに言つ。

「何がですか？清さんの経験にない死体だから、人間じゃない？くだらない。イカレた糞野郎が出てきたってだけですよ。轟さんもよく言つたじやないですか。事実だけを見る、狭い視野で物事を語るなつて」

轟は困る様に頭を搔く。

…ちつ。小僧の悪い癖だ

「ふん。言つようになつたの。南の言つ通りじやよ。だが、儂にはとても人の犯行とは思えぬのじや。それも事実じやよ」

僅かな沈黙が訪れる。三人は思考を巡らす。

「…腑に落ちないな」

綾人は顎を片手で抑え、呟いた。

「何か気づいたか？」

「ええ。犯行に一貫性がないと思いませんか」

綾人の言葉に轟も同感だった。

「検死結果から冷徹な人間というのは推察できます。しかし、そこまで冷徹な人間が何故あんな場所に死体を遺棄した?河川敷沿いには散歩もできるし走る奴もいる。地中深く埋める訳もなく、目の前にある川に沈めるでもない。自分に繋がる全ての証拠を抹消できる人物が、何故死体を隠さないんだ。死体さえ見つからなければ事件は明るみに出ないので。まるで死体を発見してほしそうだ」

轟は小さく頷く。そして綾人に、続けろと促した。

「(+)までの情報で推察できる人物は、異常な性欲者で残忍冷酷。且つ、強い自己顯示欲を持つ人物」

清じいは腕を組み頷いた。

「成る程。自分の犯行を世間に見せつけたい訳じゃな」

轟は鼻息を勢い良く吐き出す。

「はつ。つまりはイカれた野郎つてこつた」

綾人は思考を回転させる。ただのイカれた野郎か?いや、違う。殺しに絶対的な意志を感じる。計算し尽くされた犯行と裏腹に、安易な遺体遺棄。強い自己顯示欲?それもあるが、別の見方もある。

強いメッセージを感じる。更なる犯行示唆。警察への挑戦。どれも考えられるだろう。だが、綾人に渦巻くメッセージは一つだった。

『やつぱりまた会いに行くね！待つててね！』

鷹司の言葉が、綾人の脳裏を何度も駆け巡った。

## 第七話 愛・求む全てを叶えたい

署に戻り簡単に報告書をまとめて帰宅する。若干の鈍痛のせいで運転が幾分慎重になっていた。午後の十時近くに帰宅した。

「今、何時だかわかる?」

玄関に柑菜が立ちはだかっていた。帰る直前に綾人は柑菜にメールした。十時に帰ると。それだけだが、立ちはだかる柑奈の表情には怒り、憤りが映っている。しかし、美しさには微塵の揺らぎはない。

「十時過ぎだ」

綾人は弱く答える。

「正確には二十一時と三分三十秒よ」

綾人の耳に涼やかな風が流れた。やはり柑菜は完璧だ。

突然、綾人の頬に衝撃が走る。柑菜が勢いを込めて叩いたせいだ。肩を小刻みに、怒りに震わせる。

「どうしてー約束を守らないの!」

また綾人の頬に衝撃が走る。それは繰り返し、繰り返された。

遅れには理由がある。薬の効果が切れた。鈍痛も不定期に訪れ、虚脱感に倦怠感。強い吐き気で運転が思うようにいかなかつたせいだ。

「すまない」

綾人は謝罪をする。繰り返し、繰り返す。受け入れられる訳がないのは知つているが、続けなければ柑菜はさらに憤る。

「何がすまないよ！どうして私のリズムを乱すの！許せないわ！！」

柑菜は誰よりも、何よりも完璧を愛す。七年前からそれは臨界を超えた。

柑菜は泣き、叫んだ。綾人に背を向けて部屋に戻り、金切り声を上げ、部屋にあるあとあらゆる物を投げる。

様々なガラスが割れ、紙類は引き裂かれ、物は飛んで壁に当たる。

綾人は柑菜の背後から、優しく抱き締めた。

「すまない、柑菜」

さらに甲高い金切り声が綾人の耳を劈く。この声も魅力的だと、綾人は感じていた。

柑菜は綾人の腕を払う様に暴れ狂う。かなりの体格差があるので、綾人は少し振り回された。

その際、足裏に痛みが走った。包丁を踏んだ。しかし、切れ味が悪かつた為、皮膚は破れなかつた。

「いいわ。寛大な心で許しましょう」

振り払う力が消えると同時に、声質が急転した。

「どうすればいいか、わかるわね？」

柑菜の声が綾人の脳内に響き渡る。逆らえない。そもそも逆らう気などさらさらないが、柑菜の声には魔力でも宿っているかのように綾人を操る。

綾人は抱き締める腕を離し、柑菜の正面に向かう。柑菜は同時に動き、倒れた椅子を直し、足を組み座った。

「跪きなさい」

逆らえない。逆らう気などないし、むしろ喜んで従つた。綾人は柑菜の足元に跪く。頭を足元まで平伏すと、ストッキングを丁寧に脱がした。

蒸れた足に丁重に舌を這わす。しゃぶり、舐め回した。

「肩」

快感で目が眩む。

「塵野郎」

絶大で甘美な快感が全身を包む。だが、しかし。

「そんな嬉しそうな顔してるので、こつちは相変わらず役立たずね」

綾人の口の中には足が、綾人の股間に這う。器用に動く足先が、

絶妙な振動を作る。

だが、一向に性器は反応しなかった。

こめかみに鈍痛が襲う。吐き気が戻ってきた。

「何時になつたら私を抱けるのかしら？」

柑菜の言葉に呪いが籠められている。呪いが綾人の神経を蝕む。こめかみに鈍痛が襲う。

「舐めなさい」

綾人が呪いに苦しむ最中。柑菜は下着を脱ぎ、片膝を上げた。秘部を隠す事なく。

綾人は抵抗する事なく、秘部に舌を這わす。なんという美味。極上のワインも、絶品の肉も、この味と肉感には震む。

「インポ野郎」

こめかみに鈍痛が襲う。

「舐めるしか能がないのね」

柑菜の声は完璧に調律された弦楽器のようだ。

「役立たず」

「こめかみに鈍痛が襲う。胃の内容物が喉元に迫る。

「吐いてみなさい? 腕を喉に突っ込んであげる」

罵声が清らかな清流音に聞こえる。

「役立たず」

「こめかみに鈍痛が襲う。確かに柑菜はそう言った。その意味が籠められていた。もう、限界だった。

秘部を這つ舌が止まる。激しい鈍痛に意識が奪われようとしている。

「もう、限界?」

美しい旋律も綾人には届かない。薬が欲しい。

「愛してるわ」

全身の細胞が唸りを上げる。

「愛してるの」

意識は覚醒する。鈍痛に堪える意思が備わる。覚醒と同時に休んでいた舌の動きを再開した。

!

突然の刺激に柑菜の全身に電流が走った。耐え切れず秘部から大量の液が噴出した。

柑菜の快感は絶頂を向かえた。床には柑菜の液が一面に広がる。

綾人は全身に染み込んだ一連の動作を続ける。すなわち床に広がる液に舌を這わす。

それを柑菜は暫く見つめ、床に汚れがなくなると綾人を抱きしめた。

「愛してる」

柑菜は言葉に表し、綾人は行動で示した。

どうやら許されたようだ。そして綾人は思つた。

これが俺の愛の形。是も非もない。柑菜の求める望み全てを叶える。それが綾人の存在意義なのだ。

綾人は今日も幸福に満たされた。

## 第八話 病状悪化

翌日。午後。新宿、裏町の病院。

「先生！誰か先生を呼んで！」

看護士が病院の入口で叫んだ。ちょうど近くにいた医者は叫びの中心へ向かつた。

「これはこれは。南さん、お約束通り来てくれましたね」

看護士は綾人を肩で支えている。足元は定まらず、女性に身を任せている。しかし、女性の力で綾人の体重を支えるには少し無理がある。

「先生の患者さんですか！？見たらわかるでしょうに…この人、倒れる寸前ですから手伝って下さい！」

綾人の顔面は蒼白して、脂汗を大量に吹き出している。見るからに体調が悪そうだ。

「おかしいですね？薬は昨日飲まなかつたんですか？」

綾人の辛さなど、一切介す事なく、たんたんと質問する。冷静すぎる姿と、手助けをしない苛立ちで看護士は医者を強く睨んだ。

「柑菜が…何処かに…」

昨夜の柑菜の行動で部屋にある全てのものは半壊近くの被害となつ

ている。薬を入れた赤い小瓶も被害にあっており、投げて割れていった。荒れ果てた部屋から薬を探し出すのは不可能だったのだ。

「要領を得ませんが、彼女絡みなのはよくわかりました。では、君。第三治療室へ南さんをお連れして」

医者の発言に看護士は当然に驚いた。そしてさらに強く睨みつけた。

「そんな田で見られましても。私は治すのが専門で。力仕事は専門外ですから」

そう言うと医者は看護士に見える様に腕をまくつた。不健康そうな白い肌に、か細い腕だ。看護士が理解したところで、振り向き移動した。看護士は理解したが納得はしていない。看護士が何か叫んでいるが医者の耳には入らなかつた。

夕刻。

「もう大丈夫そうですね」

夕陽の照る病室で、医者は綾人の瞳孔の動きを確認する。綾人はベッドに横たわり疲労の表情を浮かべる。

「すまない」

「かまいませんよ。しかし何故ここまで悪化したんでしょうか。薬が合いませんか?」

「いや、薬の効果は絶大だ。副作用もな」

皮肉を込めて笑う。

「副作用の説明はしたはずですよ。では、原因は何だと思いますか？」

医者も皮肉を込めただろう。だがあの一言だけで説明をしたつもりか？綾人は当然思ったが、医者の性格は把握済みな為、特に追求はしなかつた。

「鷹司からの電話のせいだらうな」

医者は目を見開いた。

「… そうですか。七年ぶりですね。そんな状態なら朝一にすぐ来て下さればよかつたのに」

「片付けたい仕事があつてな。薬を飲んで眠る訳にはいかなかつたんだ」

綾人は午前中に携帯の着信解析を携帯管理会社に依頼しに行ついた。死体遺棄現場と鷹司からの着信が近ければ、綾人の推理を固める事になる。答えは明日にでも出るだらう。同時に以前の資料も穴が空く程見直したが、新たな手がかりらしきものは出なかつた。

同じく二日前の事件も犯人への手がかりはなかつた。解つたことといえば、犯人の冷徹さ。死体遺棄現場と犯行現場は違うことが判明した。更なる検死で皮膚の裂傷の結果も出た。遺体遺棄現場で暴行

していたら、傷口に何らかの植物の成分があつてもおかしくない。現場は鬱蒼と雑草が生い茂つていたからだ。

確かに、あの現場で暴行をする訳がない。人目につかないとはいえ、女の叫び声を聞いた人間がいないのは犯行現場が違うことを示していた。女の口元に猿ぐつわ等の拘束傷も見受けられない為、その根拠を更に固めた。

「仕事に生きるだけが人生ではないですよ」

医者の発言に綾人は笑ってしまった。

「あんたにだけは言われたくないね」

医者もつられて笑ってしまった。だが、ひどく醜い笑みだ。

「よろしければ鷹司さんからの電話の内容をお聞かせいただけますか？」

綾人は事細かに鷹志との会話を伝えた。未だに脳裏に鮮明に浮かび上がつてくる。一言一句、詳細を話した。それを聞くと医者は思考を回転させる。

「…おかしいですね。会話内容に疑問点が一つ。更に、南さんに大きな矛盾点が一つ見受けられる…。しかも矛盾点に南さんは気付いていない…？これは非常に興味深い…」

「まあこれが頭痛の大きな原因だな。だが種はまだある」

綾人は続いて二日前に起きた殺人事件の件を話した。この医者は守

秘義務を守る。綾人はそれを知っている為、一般人では知り得ない情報を伝えた。

「成る程。それは大きな頭痛の種ですね」

医者は綾人の話を簡潔にメモに書いた。

「ふむ。それで南さんは鷹司さんと今回の事件の関連性を睨んでいると」

「ああ。あまりにタイミングが良すぎる。七年前よりも残虐性は増しているが、暴行や手がかりなど、証拠を残さないところに類似点はある」

短い沈黙が流れた。綾人には医者は何か考えているように見える。

「先生。あんたはどう思う？鷹司の可能性はあると思うつか？」

医者は綾人を見て笑う。少し苦々しかった。

「さて、私には難しそぎますね」

医者の腹の内では答えは決まっていた。だが、綾人の意見に是か非かは読み取れなかつた。

「ああ、先生。できれば風邪薬も処方してくれないか？少しだるくてな」

綾人は話題を変えた。これ以上、無駄話に花を咲かせるつもりはない。

「わかりました。頭痛薬と発熱を抑える薬も処方します。こちらも二日分で」

「そんな事しなくてもらひやんと通つむ。ビーツやら頭痛も続きそつだしな」

「ふふふ。軽い嫌がらせですよ。特に意味はありません。さあ、それでは…」

医者は眼鏡をしっかりと掛け直す。椅子を回転させて綾人と向かい合つた。そして医者なりに爽やかな笑顔を作る。

「カウンセリングを始めますか」

綾人から見ればひどく醜い笑顔だった。

## 第九話 カウンセリング

綾人はベッドから椅子に移ると、医者は綾人の瞳、一点を見つめる。暫くの沈黙の内、話を始めた。

「南さん。今回のカウンセリングでは今までの病状と現在の病状を見比べる為にも、原点に戻りましょう。勿論、答えたくないことは答えなくて結構です。リラックスして受け答えして下さい」

綾人は小さく頷いて了承した。

「それでは頭痛が始まつたのは何時でしたか？」

綾人は少し前屈みになる。両手を膝の上で交差させた。

「正確な時期はハツキリしないな。中学時代だらう」

医者は立ち上がりと小さな窓を開けた。夕日が窓に映る。綾人に背を向けたまま外を眺めた。

「原因は何でしたか？」

綾人の額に、少量の水分が浮かぶ。

「ひどく、痛かった。授業もろくに受けられなくて病院にも通つたよ。だが、どの医者も原因は解らないと言つた。何せ、CTもMRIにも一切変化は見受けられなかつたからな。腫瘍もなく、血栓にも異常がない。恐らく神経性の物だと、言われた」

綾人の話は暫らく続いた。何件も病院に通つた事実。痛みはあるのに理解されない苦痛。効かない薬に頼らざるを得なかつた現実。様々な内容を話していた。

「南さん」

綾人の話の途中に割り込む様に医者が話した。相変わらず背を向けてままで、後ろ手を組んでいた。

「私は原因は何ですか、と聞きました。もし、答えたくないなら答えたくないとおっしゃって下さい」

綾人の額にさらに水分が集まる。それは額を通り、鼻筋へ流れた。一滴のみなので鼻先で止まつている。

こめかみに鈍痛が襲う。小さな針に刺された程度の。

医者の言つ通り、綾人は話を逸らしていた。それは自己を防衛する働きの為、無意識に行なわれていた。医者の言葉で防衛機能は止まり、原因を話すこととした。

「いじめ、だらうな」

鼻先に留まつっていた水分が、床に落ちた。水分の正体は脂汗だつた。

「ある日、突然いじめられ始めた。ひどいもんだよ。クラスメイト全員から罵倒され無視をされる。友達と思っていた奴らは、俺を足腰立たない程殴り、唾を吐き、小便をかけた。それからだらうな。頭痛が起きたのは」

綾人は話を続けた。日々エスカレートしていく陰湿ないじめ。教師にチクリうものなら、さらに陰湿にエスカレートする。綾人を助ける者は誰もない。いじめから救われる要素の内、教師、友人、肉親などは綾人に意味は為してなかつた。

「でも、ある日頭痛を消すことができたんだ」

額の脂汗が増える。さらに胸に熱を覚える。この感情は何だ？

「ほう。それはどうしてですか？」

綾人はさらに前屈みになる。ある感情を抑えられなかつた。その感情を医者に悟られたくないのか、綾人は表情が見えない様に前屈みになつたのだ。だが、医者は綾人に背を向けたままだ。綾人の表情など分かる訳もない。綾人から何時もの冷静さが消えかけていた。

「いじめのリーダー格を襲つた」

短い沈黙の後、綾人は続けた。依然として、前屈みのままだ。

「夜中だつたな。背後から金属バットで一撃。後は馬乗りになつて素手で殴つてやつた。何度も。何度も。鼻が折れ、歯が折れようとも。何度も殴つてやつた。こつちの拳が折れるかと思つた。他の主犯の奴らも同じ方法でボコボコにしてやつたよ」

綾人の肩が震えていた。気温は低くない。虚脱感もない。何故、肩が震える？答えは綾人の表情にあつた。胸に熱を覚える。熱がつた。熱は踊つていて。熱は綾人の口元を歪ませていく。歪みはひどくなり、歯が見え始めた。綾人は笑つていた。だが、その笑顔はひどく醜かつた。この感情は何だ？綾人は知つていた。この感情は“歓喜

” だつた。

パンツ、と音が鳴つた。医者は何時の間にか、綾人の正面に立つていた。音は医者が手の平を叩いた音だつた。

「はい、お疲れ様でした。南さん、今日のカウンセリングはここまでです」

医者なりの満面の笑みを作つた。綾人は医者の音と声で、視線を医者に映していた。

「もういいのか？」

「ええ、結構です。では、また次回」

そう言つと医者は資料を集め、カーテンを開けた。部屋の片付けを済ませると部屋を出ていった。

こめかみに鈍痛が襲つ。痛みのせいで、さらに脂汗が溢れた。

こつじて、一回目のカウンセリングは終了した。

## 第十話 再びの電話、そして再会

病院を出た。時刻はすでに午後十時を過ぎている。綾人は車で自宅へ向かつた。柑菜との時間を過ごせなかつた。堪え難い。ならば、ぜめて隣で寝顔を見ていきたい。

逸る心とは裏腹に、速度は制限速度よりも遅い。遅くないと事故を起こしそうだつた。微かにハンドルを握る手が震える。額から際限なく脂汗が溢れる。こめかみの鈍痛も、やや重い。気分は最悪だつた。嫌な過去を思い出したせいだ。そうに違いない。

一時間弱で帰宅できるにも関わらず、一時間経つても中間地点の秋葉原近くまでしか辿り着けなかつた。さらに同じ時間をかけ、自宅の船堀に入る。時刻は零時を回つてしまつた。体調の悪さよりその事実が綾人には酷だつた。

さらに気分は病院を出た時よりも悪化してきている。確實に病状は悪化している。早く薬を飲みたい。それを強く思い自宅の扉を開けた。柑菜はやはり眠つている。美しい女神がベットに横たわつていた。眠りを妨げない様に台所へ向かう。薬を飲む為だ。

だが、その時だつた。

綾人の携帯が震えた。

携帯の震えに共鳴するが如く、胸も震えた。スーツの内ポケットにある携帯をすかさず取る。この時間にかけてくる人物は一人しかいない。一人は轟。轟の可能性は極めて低い。綾人と柑菜にとつて有益な情報が見つかる可能性が低いからだ。となると、残りは一人しかいない。

震える携帯を取り出し着信主を確認する。非通知設定。胸の鼓動がさらに高鳴り、逸る。足音を最小限に殺して、ベランダに出る。直ぐ様、通話ボタンを押した。

『あはは！繋がった！よかつた！』

陽気な声が綾人の鼓膜を貫く。刹那に三半器官が音を震わせ、脳へ伝達する。脳から雷光が如き神経伝達が、全身を走った。手先の震え、頭痛、吐き気等は全てかき消される。

「鷹司いいつ！？」

綾人は再び吠えた。声帯がはち切れんばかりの怒声だった。

『綾人！嬉しいよ！こんなにも早く、また話せるなんてね！』

『てめええつ！何処にいる！？ぐだらねえ電話をするぐらいなら直接会いに来い！殺してやるよおお！』

電話先からケラケラと陽気な笑い声が聞こえる。その声に更なる怒

りが綾人を包み込む。頭が熱い。

『あはは！焦るなよ綾人！再会は君次第さ！』

ケラケラと綾人を嘲る様に笑つた。綾人の問いに答える気は一切ない。そんな笑い声だつた。さらに頭に熱が集まる。

「ふざけるなつ！！今すぐ来い！今すぐ殺してやるからよおつ！！」

ありとあらゆる血管が切れそうな錯覚が綾人を襲う。現在の綾人の全ては憤怒と共に存在した。熱はさらに一点に集中し始める。

『落ち着きなよ、綾人。まだ長く話す時間はない。用件のみ手短に済ませるよ』

綾人の憤怒は止まらない。全身が憤怒に震える。熱の中心は何処だ？

『今日はチャールストンの新作のスーツかい？だが、黒のネクタイはいただけないな。ネクタイは赤のが似合うよ。血のような赤がいい』

綾人の内腑を憤怒が食い尽くしていく。暴れ狂う感情に五感を失いかける。だが、熱は感じ続ける。熱の中心は何処だ？

「てめえ！－ぐだらねえ話を…」

また叫ぼうとした、刹那。

綾人はベランダの柵に乗り掛かる様に下階を見渡す。

何故、スーツの種類がわかる？

『さすが、綾人』

綾人の部屋は五階。深夜のうえ、家の周りの街灯は少ない。階下の状況がよく見えない。

『そうだ、綾人』

見ろ。闇の中を。目を凝らせ！全神経を集中させる。目が瞬時に充血する。だが、至らない。足りない。もつと凝らせ！

綾人の瞳孔が大きく見開く。同時に鼻筋から一本の赤い液が、溢れ流れる。その時。

『久し振りだね、綾人』

階下に、鷹司が笑顔で立っていた。

脳が燃える錯覚を感じた。

## 第十一話 渴望の代償

鷹司は暗闇の中で妖しく、携帯を片手に口元を歪ませて微笑んでいた。柔らかいパーマで金髪の髪が夜風になびく。黒革のスーツに深紅のネクタイ。七年経とうとも“あの日から”全く変わらない。悪魔の様な微笑みで見上げていた。

綾人はベランダの柵を強く握り、その姿を見た。相変わらずの憤怒に全身を震わせ、歪んだ歓喜も表情に出ている。鼻からは止まる事なく血が流れる。脳が熱い。唇まで血が流れる。舌を伸ばし舐め取つた。鉄の味がした。鬼の様な微笑みで見下ろしていた。

『何を呆けているんだい？僕はもう田の前だよ！さあおいでよ』

綾人の部屋は五階。飛び降りれば軽傷では済まない。ならば階段で降りればいい。だが、綾人の選択肢にそれはない。まだ飛び降りたほうがましだと思っていた。

七年。存在意義が二つに増えた。柑菜の望みを叶える。そしてこの男を殺す為に生きてきた。無論、ただで殺す訳はない。綾人と同じ絶望、それを越える恥辱を味あわせ、屍肉を切り裂き、豚とゴキブリの餌にする。殺し方は七年前から決めている。

渴望した男が眼前に現れた。その男から目を逸らせる訳がない。階段を降りている間に鷹司はまた消えるだろう。憎悪の対象でしかないが、頭の回転の早さは認めざるをえない。鷹司の事は綾人が一番理解している。

絶大な悔やみが訪れる。懇願、渴望した再会に何もできない自分が

憎い。

『懸命な判断だね』

黙らせろ。

「何故、直接俺を狙わない？無関係の女を無駄に殺してどうなるー？」

『さあ？どの女の事だい？それにこの世に無駄といつ概念はないよ。何の因果か、こいつして綾人と再会した。意味はあるじゃないか』

稚拙な誘導尋問。鷹司に通用する訳がない。落ち着け。今、できる事を考えろ。この時間を無為に終わらすな。瞬時に思考を回転させる。さらに脳が燃えた気がする。鼻血の流れは止まらない。

「貴様の目的は何だ？」

綾人の電話口から溜息が聞こえた。

『綾人。君に変わり柑菜ちゃんを愛する為だよ。僕の存在意義はそれだけだから』

憤怒で視界が揺れた。あまりの感情の昂ぶりに言葉が出なかつた。

『不条理だろ？愛とは心も体も満たしてこそ、眞の幸福で満たされる』

脳に灼熱を感じる。鼻血の量が増えた。

『心だけじゃ駄目なんだよ。彼女の事はよくわかるだろ？彼女は

セックスが好きなんだ。僕みたいに何度もイカせてやらないとね!』

## ケラケラケラケラ

嘲笑う鷹司の声が綾人の耳を劈き、心を抉る。

再認識した。殺す。最も残虐に、屍肉は細切れになる程にハツ裂きに。

「柑菜は渡さない。そしてお前は必ず殺す」

綾人の声色に変化が起きる。その声はまるで、人でなく、獣のそれに近い。肉食動物が雌を守る為に威嚇するかの様に。

『楽しみに待つ事にするよ。次はもっと近くで会おう』

鷹司はそういうと携帯を切つた。最後に一つ投げキッスをして闇に紛れる様に、綾人の視界から消えた。通話が終了した音が綾人を苦しめる。綾人の内腑、脳髄、全神経が憤怒で踊る。最大限に握り込む拳から血液が滴る。強く歯軋りをする。氣味の悪い金切り音が鳴つた。あまりの憤怒に気が狂う寸前だ。

同時に激しい後悔が綾人を苛める。七年。七年の月日を費やし、追い求めた人物との接触で、何目的を果たせなかつた。それどころか話すらまともに聞けない。屈辱の言葉を浴びせられた。黙らす事が出来なかつた。正に、悪夢だつた。鋼鉄の意志は軟化していき、後

悔が綾人を包み、憤怒は萎え始めた。

その刹那。

こめかみに鈍痛が襲う。激烈な鋭さを備えて。

全身に高圧電流が流れた様な反応をする。背を仰け反らせ、一瞬呻き声を上げる。声にならない声を漏らす。反射するように、両手でこめかみを抑えるが痛みは収まる訳がない。勢いで携帯はベランダの冷えた床に落ちた。脳髄が爆発する様な痛みが綾人を際限なく襲う。口からは嗚咽と共に唾液が零れる。更には胃の内容物が逆流を始めた。激しい嘔吐をする。

急激で激しい鈍痛だった。状況把握など出来るわけもなく、痛みにのたうち回る。視界はじょじょに狭くなり、暗闇のが多く映り始める。手足に力は失われ、ベランダの床に膝をつく。

激烈さを極めた痛みは同時に恐怖も連れて来た。恐怖の意味は“死”だった。生命の危機を感じる。本能が綾人に伝えた。激痛に耐え切れず、首を支える力も失われ、ベランダの冷えた床に頭を落とした。

その衝撃で内ポケットから小さな袋が綾人の目に前に落ちた。袋からは錠剤が顔を出している。

激痛に苛まれた綾人に救いの手が差し伸べられた。激しい震えの中、錠剤を取り出す。勿論、乱暴に手掴みで取つたので何錠か把握している訳がない。その事実に構う訳もなく、綾人は口に放り込んだ。

興奮した血流が穏やかさを取り戻す。激烈な頭痛は秒間毎に痛みを消していった。

同時に強大な睡魔が綾人を襲つた。適量ですら堪えられない睡魔なのに、過剰摂取すればどうなるかは火を見るよりも明らかである。卒倒するかの様に意識は寸断された。

## 第十一話 夢、目覚め（前書き）

致命的な間違いを訂正しました。気にならない方は気になりません。極少数の見てくれている読者の方々、大変申し訳ございません。これから中盤です。執筆頑張ります

## 第十一話 夢、目覚め

どうしたの？ また頭痛？

ああ。羨ましいよ

何が？

ここまで同じなのに、何故頭痛は共有されなかつたのかな

あはは

重い瞼が少しづつ開けつつしていた。だが、強烈な虚脱感がある。もう少し眠つていてたい。しかし、体のどこかで命令が下される。

目覚めろ

何の声だ？

脳からの命令だ。

『目覚めろ』

瞼を開いた。視界がぼやけてよくわからない。秒間に少し見えて

くる。目線の先に白い壁があるのに気が付いた。それは天井だった。体に布団が掛かっているのを確認する。ベットに横たわっているようだ。さらに視界は鮮明になる。誰かベットの横に座っている。確認する為に首を動かす。それに伴い、布団も少し動いた。

「綾人！よかつた！！」

ベットの僅かな動きを察知した柑菜が大きな声で言った。そしてベットに眠る綾人に飛び付いて来た。寝起きの状態など氣にもかけずに、強く抱きついた。

「綾人の馬鹿！私一人残して死なないって約束したじゃない！死ぬ時は一緒って言つたじやない！また愛する人を失うかと思って…私…私…」

柑菜は声を上げて泣いた。綾人は柑菜が何故泣いているか理解できていない。

「柑菜…？どうしたんだ？」

艶のある黒髪が綾人の鼻孔を掠める。甘い香りを感じた。幸福を感じる。虚脱感と幸福が思考の回転を止める。暫らく抱き合つ。約五分程、抱き合つと柑菜はベットの上部にある電話を手にする。

「先生。綾人が気が付きました」

一分も満たない内に、綾人と柑菜がいる部屋の扉が開いた。一人の初老の男が扉の外から入ってきた。

「ふう。一時はどうなるかと思いましたよ」

一人は綾人の主治医の医者だった。安心するように息を吐いた。

「やれやれ。心配かけるなよ」

もう一人は轟だった。愛用のハットのツバを擦る。

「先生…轟さんも。どうじうことですか？」

虚脱感に包まれる綾人もさすがに現状がおかしい事に気が付く。思考を回転する。だが上手く回らない。脳からの命令は虚脱感が邪魔をする。

「無理もないです。南さん、薬は適量を守らないと。どんな良薬も毒ですよ」

医者はベットに近付く。ベットの側まで来ると綾人の手首を持つて脈拍を調べ始めた。

「おめえは一週間も眠っていたんだよ」

轟はベットの側の椅子に座った。隣には柑菜が座る。

「一週間前の早朝にベランダで倒れている南さんを柑菜さんが見つけたんです。意識不明だったので救急車を呼んで病院に担ぎ込まれたんですよ」

医者は次にポケットから取り出したペンライトで綾人の瞳孔を調べる。すると綾人が突然起き上がろうとした。

「そつだ……俺は……！」

綾人は目覚める前の記憶を思い出した。七年間追い続けた人物との再会で、限界以上の憤怒で激しい頭痛に見舞われた事。適量以上の多量の薬を飲んで意識を失つた事を思い出した。だが、起き上がるうとする綾人に強い眩みが襲う。耐え切れずまたもベットに横になつてしまつた。それを見て柑菜はひどく心配する。

「落ち着けよ、小僧。柑菜ちゃんにこれ以上心配かけんな」

轟の言葉で起き上がるのを止めた。心配をかけるな、と轟は言つ。それは勿論だが、それよりも重大な事実がある。鷹司と話した事を柑菜に悟られてはいけない。その事実が綾人を冷静にさせた。

「どうやらもう心配ないですね。もう一、三日間、体を休めたら退院です」

医者の一言で柑菜は漆黒の瞳に涙を浮かべる。よく見ると柑菜の頬が少し痩けている。目元にも若干のくまがあつた。柑菜の心労を表していた。綾人はそれに気が付くと強い罪悪感に苛まれた。

「柑菜。心配かけてごめん。もう大丈夫だ」

その言葉で漆黒の瞳の堰が切られる。涙が溢れ出し、周りの目を厭わず綾人に抱きついた。綾人も虚脱感を必死で抑え、柑菜の頭を撫でた。

「(+)は若ければ連中だけにしてやるか。ヤブ、出るぞ」

轟と医者はお互い小さく笑つて病室から出ようとする。

「後でお二人揃つて、また来てくれませんか？」

泣きじゃくる柑菜を抱き続けたまま綾人は言った。

「わかつたよ。こっちも話があるからよ」

轟は背を向けたまま言つた。綾人は轟の背中に何か意志を感じた。  
医者は小さく頷き、病室を出ていった

## 第十二話 第二の惨殺、消えた履歴

それから数時間が経つた。日も沈んだ頃に綾人の病室の扉が開いた。

「もういいのか？」

轟が歩きながら言った。小さい椅子を一つ出して一つに座る。医者は醜い微笑を浮かべ、もう一つの椅子に座った。

「ええ。柑菜には部屋の片付けを頼んでおきました。お一人にも心配をかけましたね」

医者は鼻まで落ちている眼鏡を持ち上げる。よく見ると頬が薄く青がかつっている。

「全くです。危うく暴力刑事に逮捕されるとこりでしたよ

力力力つと轟が笑つた。

「てめえが忠告を無視して、認可の降りるわけねえ薬を小僧に出すからだよ」

二人は小さく笑いあつた。恐らく頬の痣は轟が殴つたのだろう。殴つた男と殴られた男が笑い合つていた。妙な雰囲気はすぐ終わり、轟が綾人に尋ねた。

「さて、小僧。何があつたか詳しく聞かせろ」

轟の眼差しが真剣さを帶びた。医者も同様だった。

綾人は記憶の最後を話した。一言一句、詳細を聞かせた。鷹志から再びの電話。会話内容。さらには渴望の再会。それにより激烈な頭痛と薬の過剰接種。後の失神まで話した。

「馬鹿野郎！てめえ！それだけ熱くなりやまたイカレちまうぞ！」

突然、轟が怒鳴った。鬼気迫る表情だった。

「てめえは暫らく仕事に来るな！部長に言つて自宅謹慎にしておく！」

さらにまくしたてる轟。握る拳は振り上げる寸前だ。少し常軌を逸する怒りだつた。だが、綾人の過去を知り、さらには息子の様に育ててきた轟には無理からぬ事だつた。綾人は轟の怒りを大人しく受け止めた。綾人には轟の気持ちを理解できるからだ。

「もう充分ですよ。南さんも反省してゐみたいですし。今はそれよりも考える事があるじゃですか」

医者が轟をなだめる。轟は怒りを抑え、少し落ち着いた。

「さて。それではあなたの眠つていた一週間の状況を整理しましょうか。南さん。心を静かに保つていて下さい。私が少しでも異常を感じたら話は終わりですからね」

医者は轟が落ち着くのを確認した。綾人にも憤怒を抑える様に釘を刺す。医者が小さく頷くと、轟が話を始めた。

「小僧。おめえが眠つてゐる間に、第一の事件が起つた

あまりに突然の情報だった。綾人は心泊が乱れそうになるのを必死で抑える。

「犯行は一週間前。また女が凌辱され、惨殺された」

さらに事件の詳細を伝える。

「今度は頭がかち割られていやがつた。ぱっくり開いた頭の中に、目玉が二個置いてあつた。それ以外は前回の事件と完璧に同じだ。死亡推定時刻は一週間前の一時から三時。遺体遺棄現場は船堀の公園にあるテニスコートだ。衣服も近くに捨ててある。全て発見しやすいように。被害者が消息を経つたのもその日の夜の帰宅連絡後だ。犯行現場と遺体遺棄現場の違い。モルヒネ系の摂取と電流。何から何まで同じだ」

綾人は黙つて話を聞く。心泊を憤怒が襲うが必死に抑え込む。

「被害者達を洗つても関連性はねえ。上は通り魔犯罪として捜査にあたつてる」

「馬鹿な……轟さんもそう思うんですか！？」

綾人は少し、感情を吐き出す。綾人が持つていた疑念を確信へ繋げる事件だ。死亡推定時刻から弾き出す犯行時刻も、前回と同じで電話の後だ。綾人には確実に鷹司の犯行に見えている。憤怒が飛び出しそうだが、医者の睨みでまた大人しくなる。

「…正直、わからねえ。何せ手がかりが一切ねえからよ」

轟はハットを深く被り目を隠した。

「小僧。おめえが言つてた携帯の履歴だがな。これも意味がわからねえ。発信先が掴めないだけじゃなく、着信そのものがあつた事すら証明できねえんだ。これが上がおめえの推理を無視する理由だ」

「ど、どいつことですか？」

綾人が動搖するのも無理はない。携帯の発着信は全て管理会社に統括されている。短い時間で切られたり、特殊な携帯や衛星を使った発信なら、発信先を掴めないのはわかる。だが、それでも着信があつたという記録は残る筈だ。それすらも消えているという事はどういう事だ？綾人にはわからなかつた。

「管理会社のPCに潜入すれば可能だ。だが、潜入形跡もねえ。形跡すら消す事はできるが、そんなことできる奴がいるか？」

確かにその通りだつた。管理会社のブロックは何重にも掛けられている。それら全てを突破して形跡すら残さない。手間も費用も尋常じゃない。単独犯には無理だ。

「おめえの携帯にも非通知の着信の履歴はねえ。しつかり限界まで着信履歴はあつたがな」

綾人は混乱した。携帯の履歴すら残つていない？確かに一度目の電話は履歴から消した。しかし一度目の電話の履歴は消していない。履歴に一件の空白があれば消した証拠となる。しかし、履歴は限界まで埋まっているという。つまりは履歴を消した形跡すらないというのだ。

「でも！俺は鷹司からの電話を受けました！それは真実だ！信じてくれないんですか！？」

轟はハットのツバを持ち上げる。

「勿論、信じているぞ」

一切の乱れもない、心の通った言葉だった。綾人は少し安堵した。そして轟の気持ちも理解した。綾人を信じてはいるが、拭いきれない事実がある。ジレンマに捕われているのだろう。

「わからねえのは考へてもわからねえ。だから俺は決めた」

轟は口元を延ばした。

「とつあえず鷹司をとつ捕まえちまえばいい。それから洗つて考えりやあいいんだ」

何とも豪放磊落だった。綾人の信じた男の姿だった。

「とつあえず小僧の携帯履歴をもう一度洗おう。そして、小僧の体が回復したら検査再開だ」

医者は呆れる様にため息をつく。

「いいんですか？上の指示を無視しても」

「かまいやしねえよ。定年間際のデカと、問題児のデカがいなけれや上は安心するんじやねえか？」

医者はせりてため息をして呟つ。

「無理ですよ。これ以上負担をかければ以前の様な精神に戻つてしまつ」

轟は鼻で笑つてしまつた。

「うちのガキを舐めるなよ。同じ失敗は繰り返さねえ。そう育てたからな」

医者は少し苛立ち轟を見て呟つた。

「医者の立場上、認める訳にはいきません。一月は安静を約束してもらえないなら薬は出しませんよ?」

少し強い口調で呟つた。綾人は心配そうに轟を見る。一月は長すぎるので出来ればすぐにでも検査を再開させたかった。すると轟は綾人を見て小さく笑つた。そして医者を見る。

「おめえの違法投薬。目をつぶろつ」

医者は黙つてしまつた。轟は取り引きを持ちかけている。そして轟は取り引きで損をするよつた愚かな男でない。医者はそれも知つていた。

「参りました。降参ですよ」

医者は渋々了承した。

「安心しろ。小僧には病院に通わせる。退院までの二日間は集中的

にカウンセリングさせてやる。退院後も以前の様に薬は三日分でいい

医者と轟の取り引きは成立した。綾人は胸を撫で下ろした。

「いいな、小僧。三日間はしつかり休め。捜査に入つてまずそなうらすぐ止めるからな」

綾人は強い決意を心に秘めて、小さく頷いた。

## 第十四話 医者の信念、真夜中の訪問者

その五日前。つまり綾人入院一日目の出来事。

医者は深夜の病院の自室で頬を撫でていた。青く鬱血している。そして机にある歪んで曲がった眼鏡を見つめた。現在の医者は裸眼で、一寸先も見えていない。眼鏡をかけず、医者は前日の出来事を思い出していた。

「…で、意識が戻らねえ理由は、ブドウやら何とか神経のオーバーヒートって訳だな？」

医者は轟の言葉に深い溜息を吐く。だから病状を詳しく説明する必要がないと言つたのに。

「概ね合つてます。様は過剰活動。言葉を変えれば暴走」

轟は途中から話を聞かず、頭を搔いた。

「そいつはおかしいな」

医者はまたも深い溜息を吐く。

「人の話も聞かずに何を…」

「おめえが出した薬だよ。ただの頭痛止めじゃねえよな

医者の言葉を遮った。そして空間の空気の種類が変質したのを医者は感じた。轟から異質な空気が放たれている。威圧。その表現が相

応しい。

「おめえの事だ。また“治す”事を優先して“命”を追いやったな？」

一步。轟は医者へ歩み寄った。肌も精神もさらに強い圧を感じた。医者は微動だにしない。返答次第では圧力は行動に移されるだろう。だが。

「私が治さないと、貴方の大事な息子さんはまた精神病棟行きですよ」

信念は曲げない。医者の言葉が終わると同時に、轟の頑強な拳が医者の頬にめり込む。勢いよく倒れ、周囲にある医療器具も音を立て倒れた。

「一発。これで勘弁してやる」

轟は拳に着いた血を払つた。轟の年齢は六十を越えている。だが、医者の痩せ細つた体に關係なく、人を一撃で殴り倒せる体力を持つていた。

医者は倒れたままだが、動じる事なく頬を拭う。

「見当違いも甚だしいです。南さんは全てを了承して私の治療を受けてるんですよ」

枯木の様な声と体で挑発した。殴られ様とも、己の信念が揺らがない故だ。

「知らねえよ。俺のガキを瀕死に追いやった。これは感情の問題だ」

「例え、綾人が全てを承知済みだらうとも。例え、本望だとしても。轟が許す訳なかつた。」

「本当ならボコボコにして豚箱にぶち込みてえとこだがな。小僧はそう簡単に死にやしねえ。それに俺のやりてえ様にしたら、治療できねえだろ？」

「ほう。これは驚いた。てっきり逮捕するかと思つてしまつたよ。いいんですね？南さん、『治し』ますよ？」

「目的の違いさ。今まで頭痛を“治す”。だが、今は頭痛じやねえ。“治す”は“命を救う”になる」

その通りだつた。今、綾人が死ねば医者の信念に反する。故に、救う。

「わかつてゐるようですね。これは貴方は勿論、南さんの為でもなく、私の信念故の行動ですから」

そう言つと医者はふりつきながら立ち上がる。よく見ると眼鏡が曲がつてゐた。

やれやれ、また眼鏡を新調しなくては

時は戻り、自室の医者へ。

時刻はすでに午前一時を過ぎた。医者は口元に小さな絆創膏をつけた。少し染みたのか、顔をしかめる。懐から新しい眼鏡を取り出す。机に置いた、歪んで曲がった眼鏡と全く同じ物だ。

埃を払うように息を吹き掛け眼鏡をかけようとする。

それより早く部屋の扉がノックされた。医者の返事も待たず扉は開かれた。

強引な客　　そう思い、眼鏡をかけてすぐに医者は振り向き、扉を見た。

随分、眼鏡をかけなかつたせいか、視界が幾分揺らぐ。

そう、揺らいだせ이다

入口に立つ柑菜の表情に、歪んだ微笑みが見えたのは。

## 第十五話 女神、群盲への悪戯

医者は眼鏡を外し、何度も瞬きをした。目の疲れをほぐす為だ。改めて眼鏡をかけ、部屋の入口を見た。

入口に立つ柑菜の表情 憔悴しきっていた。黒のハンカチを口元に添え、表情には強い疲労感。変わらずの艶濃い黒髪に漆黒の大きな瞳。瞳の周りは赤く充血している。

当然だ。柑菜の愛する男は未だ意識不明。命の危険は回避できたが、脳波にいくつかの異常を発見した。脳波の異常と現在の意識不明の状況の因果関係は証明できないが、医者の見立てでは何らかの関係があると思つていてる。

そうだ。この状況で、歪んだ微笑みを浮かべる訳がない。先程の微笑みは見間違いだ。何度も自分の心に言い聞かせた。

「少し、話聞いてもらえますか？」

今にも泣きそうな表情。断るには無理がある。ちょうど柑菜に聞き出したいこともあった。

「かまいませんよ。お座り下さい」

柑菜は医者の取り出した椅子に座る。

「先生、綾人は目覚めるんですか？」

漆黒の瞳には涙が溜まっている。泣かれたら厄介だ。

「勿論、田覚えますよ。脳に負担がかかりすぎたので少し眠つてい  
るだけです」

一応の真実を伝える。それを聞き、柑菜は深く息を吐く。心から安  
心したのだろう。

「柑菜さん。とにかく薬は最近飲んでますか？処方した薬はどつ  
くに切れてると思つんですか？」

医者の話題変更で、柑菜の瞳から涙が一気に引いた。そして表情は  
一変し、疲労著しい顔からさらに生気が失われていく。芯の切れた  
人形の様に不気味に首を斜め下に落とす。そのせいで黒髪が目を覆  
つた。そしてまるで幽女のように答えた。

「薬ですか。そういうれば一度も飲んだ事ありません」

医者は表情の変化には戸惑わない。柑菜の病状を理解しているから。  
だが、薬を飲んでいないのは聞き捨てならない。

「どうこうことですか？この七年で一度も飲んでいない」と言つて  
すか？」

またも表情は急転。勢いよく首を上げた。そのせいで前髪は綺麗に  
額から割れる。表情に疲労感は消えないが、それでも笑顔は柔らか  
い。幽女から少女の微笑みへ変化した。

「ええ。一度も。だって、先生。私は統合失調症じゃないですから」

今度は医者が深いため息をつく。この問答は埒があかない。

「話を変えましょーか」

聞きたい事は現在の柑菜ではない。現在、最も興味深い患者についてだ。

「何故、南さんに性交渉を持ち掛けたんですか？」

さらに表情は急転。少女の頬笑みは消えた。体勢も背筋が張られる。艶光る黒髪を搔き上げた。病室にほのかに甘い香りが舞う。スリットの深いスカートから、長い脚が伸び、大胆に足を組んだ。視線。漆黒の瞳は薄く細められる。その意味 挑発的だ。

「綾人はショック療法って言つてたかしら？」

この柑菜が主たる柑菜。医者は瞬時に判断した。医者は冷静に柑菜の変化を判断したつもりだった。しかしながら、柑菜の表情で、医者は自らの内なる心に変化が訪れている事に気がついていない。静かに胸の鼓動が早まつた事が変化の兆しか。

「綾人にそう捉えられているなら、その表現が正しいわね」

小さく微笑んだ。その笑みは少女などでは決してなく、娼婦の様な妖艶な笑み。搔き上げた黒髪から、芳純な香りが医者の鼻腔をつく。

「……何か含んだ意味に聞こえますね？」

鼻腔がその甘い香りを捉えると、さらに胸の鼓動は早まつた。それでも己の本分の使命感が上回り質問を続ける。

「先生？群盲、象を評すつて言葉知つてますか？」

言葉の前に一つ、笑い声が挿まれた。その声はまるで、魔力でもあるかのように医者の鼓動を高鳴らす。そして思考する意識に痺れが起る。さすがに医者も自らの変化を察した。少し息も早くなる。医者は柑菜の動き一つで訪れる、自らの変化に戸惑いを隠せない。

「…謬ですね。確かに、視野の狭い者には物事の本質は理解できない、といつ意味でしたつけ？」

思考を止めよつとする意識を振り払うかの様に言葉を返す。「己の本分、己の感情。一つのせめぎ合いが巻き起こつてゐる。

「ええ。盲目の人達にそれぞれ象に触れさせ、感想を聞いたら全く別々の意見が出た」

言葉一つ。香り一つ。それだけで医者は胸を高鳴らせ、息を荒げていぐ。まるで性に目覚めた少年の様に。

「……そ、その謬が何か？」

ついには滑舌までに影響を及ぼした。これ以上の変化には対応できる自信はない。

「一つの真実で全てを理解した氣になるな」

突如、柑菜の口調は強まつた。少し前ががみになる。医者との距離が縮まる。シャツの胸元のから豊満な膨らみが顔を覗かせる。美しい漆黒の瞳は、一点もずれることなく医者の目を捉える。医者は目を逸らせない。もはや、逸らす気などない。医者の思考は完全に停

止した。

柑菜の漆黒の瞳から磁力でも発せられるかの様に吸い込まれる錯覚を覚える。

実際は、柑菜は一寸も前のめりになどなっていない。眞実は医者自身の上半身が前のめりになっていた。錯覚と現実の差は曖昧と化し、鼓動と呼吸はさらに荒くなり、口はだらしなく半開きになつた。

自分は一体何をしたいのか

さらに上半身が柑菜に吸い寄せられる。気がつけば、柑菜の程よく厚い唇に視線が移つっていた。だらしなく半開きとなつた口内には、唾液が行き場を失くし溢れでそうになる。反射する様に一飲みすると喉が鳴つた。

「つて意味よ、先生」

唾液が喉を超えた音と同時に、柑菜の声が聞こえた。

「先生、私とでも感謝してるので。先生がいなかつたら私の望みは叶わなかつたかもしれない」

だが、もはや柑菜の声など医者の脳になど届かなかつた。視線は唇から逸れず、どんどんその距離を縮める。もつ一つ、距離を縮めれば唇との距離は零になる。

「綾人の治療、大変かもしけませんが、どうか宜しくお願ひしますね」

社交辞令が終わると、医者のかさばった唇に柑菜の人差し指が添えられた。その向かいには柑菜の唇が重なる様に触れている。

「ところで、先生？ どうして今日はそんないやらしい目で私を見るのかしら？」

その言葉が急激に医者を現実に引き戻す。我に帰った意識が、現在の己の姿に驚嘆した。

「……いえ、私はそんなつもりは」

取り乱しながら、姿勢を戻す。だが、それよりも早く医者の股間に柑菜の足が伸びた。

「先生、今日の先生はとても可愛いわ」

妖艶な笑い声が医者を包む。医者の股間は今にも爆発しそうな程、膨れ上がる。聴覚は魔力を、嗅覚は芳純な色香を、視覚は女神を、触覚は官能が捉えていた。

「でもダメ。綾人に知られたら先生死ぬわよ？」

医者に伸びた脚が股間を一撫でする。同時に電流が流れる様に医者の全身を官能が支配した。医者の反応を見ると柑菜の脚は股間から離れていった。そして立ち上がる。

「ふふつ。可愛い人。綾人を治してくれたらご褒美をあげるわ」

最後に一つ笑顔を見せると、柑菜は病室を出た。医者には、もはや柑菜の声など聞こえはしない。己の余りの愚かさに絶望した。

医者の股間は、柑菜の一撫でこよに、異常な程、濡れていた。

## 第十六話 荒療治、非抵抗の誓い

綾人入院の八日目の昼過ぎ。

綾人はベッドの上で病院食を食べ終えたところだった。食べ終えたと言つても、半分以上は残している。ひどい虚脱感が綾人を包み、食欲は減退していた。

薬の過剰摂取。激しい鈍痛。二つの要因の後遺症なのか。それにしてもこの状態は酷すぎる。眠つても疲れが取れない。

「食を疎かにしては病の完治は遠くなりますよ」

医者が部屋に入り、綾人のベッドの横に座つた。

「わかつてはいるんだがな。どうも調子が戻らないんだ。それにこの食事、まずい」

綾人は体を起こそうとする。やはり虚脱感のせいで幾分、億劫そうだ。

「南さんの回復を待ちたいとこですが、私に与えられた時間は少ない

食事の不満に答える事なく、医者は眼鏡をかけ直す。眼鏡の奥は鋭くなる。

「わかつてゐる。それに借りもあるしな」

一瞬。柑菜の妖艶な顔が医者の脳をよぎった。秒にも満たない動搖が、医者を襲う。

「ほひ。どの借りの事ですか？」

「その傷さ。轟さんの仕業だろ？」

現在の綾人に医者の僅かな動搖を気付く事はできなかつた。万全だとしても可能性は五分程か。それほどの僅かな動搖だつた。

「かまいませんよ。今後の治療で全て返していただきすから」

「どういう意味だ？」

「」の二日間の治療計画ですが、先も言つた様に時間に限りがある。そうなれば自然と時計の針は早める事になります」

医者は立ち上がり背を向けた。窓の前に立つと綾人は答える。

「わかつてゐる。先生の好きにしてくれ」

「いいえ。貴方はわかつていない。これは治療と呼ぶには程遠い、荒療治です」

医者の口調が強くなつてきた。背を向けた為、表情はうかがえない。

「今回の治療計画の最終目標は貴方の頭痛の根治です」

そのフレーズには綾人は反応せざるをえない。動き辛い体を無理に起こす。

「そんな事、できるのか？」

綾人の顔に希望が描かれていた。医者は相変わらず背を向けているので、綾人の表情を見る事はない。窓の外を見ながら、鼻まで落ちた眼鏡をかけ直す。

「その為には貴方の非抵抗が不可欠です」

「非抵抗？協力ではないのか？」

「ええ。協力程度では足りません。非抵抗、つまりは私のする事に全てを受け入れなさい」

強い、命令口調。どうやら冗談ではないようだ。この医者の口調。態度。それら全てから覚悟が伝わってくる。だが、一つ、不可解な部分がある。綾人は抱えた疑問をぶつけた。

「一つ、疑問がある。根治の可能性がある治療方法を何故今までやらなかつた？」

当然の疑問だつた。根治できるならば、もっと早くから取り込めばいいはずだ。綾人の疑問にようやく医者は振り向く。表情は想像よりも厳しい顔だ。

「長期治療である程度の成果がありましたから。あと数年で根治の可能性は充分あつた」

己の治療計画を崩され、リスクのある治療を選ばざるをえなかつた屈辱からか。少し感情に怒りが混じつた。

「鷹司の出現のせいか」

その言葉に医者は表情を隠す。瞬時に思考を回転させた。

「……ええ。原因はともかく、南さん。ここに誓つて下さい。根治の為には全てを厭わないと」

医者の中 綾人の病状は想像以上に悪化している。鈍痛悪化の原因把握すらできていないのだから。

綾人の心中 医者のここまで覚悟。恐らく、想像以上の危険性を孕んでいるのだろう。だが、わずかにでも鈍痛の根治の可能性があるのならば、それに賭けてみたい。決意は固まった。

「不気味、だな。わかった、根治の為には全てを厭わないと誓おう。あんたはイカれてるが医者としての腕は信用できる」

「そうですか。それでは早速ですが、始めます」

医者の言葉の終わりと同時に綾人は言った。

「ただし、柑菜以外の全てだ」

「……当然ですね。わかりました」

医者の淡い目論みは外れた。その言質を取らなければ、計画の成功率は格段に上がると思っていたからだ。そもそも綾人にとつて 柑菜以外の全て にどれほどの価値があるのか。もちろん、理解はしている故に淡い目論みなのだ。

お互いの探し合いの中、少しずつ一歩ずつ治療が始まった。

## 第十七話 抑圧記憶、両親の死

「先も言つた通り、時間に余裕はありません。ですが、南さんの病状を悪化させては元も子もない。ゆえに、ある程度の制限は設けますので、ご安心を」

医者はそう言つと病室の机から銀色の大きな置時計を取り出した。分を刻む長針と秒針のみの時計だ。静寂の病室に秒針を刻む音が静かに響いた。制限とは時間の事なのか。時間がないのに、時間に制限をかける？その矛盾の意味は、それほどの短期に危険の伴う治療になるのか。綾人はそう理解し心に決心をし、小さく頷いた。

「さて、どこまで話しましたかな？ああ、南さんの初めての頭痛と、治まつた理由でしたね」

綾人は一点を見つめ表情を変えないで聞いた。

「同級生を襲つた後はどうなりました？」

少し視線を上げ、中空を見つめる。

「勿論、逮捕されたよ」

医者は大して驚きもしない。綾人の過去は把握しているが、聞き直しているのだ。

「私が質問するまで続けて下さい」

綾人は目線を左上に流す。医者はその仕草を見逃さなかつた。

「初犯でいじめられてるのは俺だからな。家裁に送られて執行猶予さ。けど両親は病死、伯父に預けられてて。伯父は引き取りを拒否した」

医者は今の発言で、話に割り込もうとした。だが、これは病状の表れだ。止まることにした。綾人の目線は依然として左上を見つめている。医者はその事より、今の発言を細かくメモに取る。大して動きはなかつた医者だが、機敏に動いた。表情は少し驚いている。

「そこで保護監として、轟さんに引き取られた。それが十五の時さ」

綾人の視線が中空に戻る。それも医者は見逃さない。

「十五から十八は轟さんと暮らした。あれはきつかったな。徹底的に教育されたよ。頭痛も弱くはあるが戻ってきた。そこで先生と知り合つたんだつけ？しかし、あんなに怒られたことなんか俺は経験してないからな。轟さんがいつも口をすっぱくして言つてた。この世は自分の思う色に染まるつて。俺はひねくれてるから世の中暗く見えるんだ。考えを変えろつて。本当、耳にタコセ」

少し、表情が明るくなる。医者は大した動きを見せない。

「十八からバイトしながら一人暮らして大検を取つた。それから二十一の時に警察試験に受かつた」

その言葉の終わりに割つて入るように医者が話始めた。

「南さん。記憶の流れをご存知ですか？」

あまりの突拍子のない問いに綾人は話を止めてしまった。不可思議な顔で医者を見る。

「現在最も有力な説です。まずは記録。記録方法は五感で録を記すという事です。目で見て、香りを嗅いで、などです。次に保持。これは脳の倉庫に貯蔵するという意味。その次は想起です。これは読んで字の如く、記憶の貯蔵から想い起すということです」

「一体、何の話だ？」

「そして、人の脳の限界。忘却。人の記憶の貯蔵から想起できない記憶です。これが大まかな記憶の流れです」

綾人の言葉など、全く意に反さず言葉を続ける医者。綾人はそれを見て疑問を持つのを諦めた。非抵抗を誓つたからだ。僅かに聞こえる秒針の規則的な音と医者の話は続く。

「忘却には一つの意味があります。想起できない記憶。想起とは記憶のパズルを完成させるものと思つて下さい。保持されたパーツが繋がらなければ記憶を想起する事はできません。ですが、忘却に至るにはもう一つの意味があります」

僅かに、間を置く。秒針の音だけが、部屋に響いていた。

「それは想起したくない記憶。これはフロイトが提唱した抑圧された記憶です」

ジークムント・フロイト。あまりにも有名な精神科医。綾人も名だけは知っていた。さらに長く間を置く。

「彼が提唱した様々な説は、その弟子達に継承され、否定されながら発展していきました。ゆえに、いくつかの異論や表現の方法に差異はありますが、ここは便宜上、抑圧記憶と呼びましょう」

医者は言葉の終わり毎に、数秒の間を置く。静寂に秒針だけが響く。

「南さんの抑圧記憶、私が想起させましょっ」

またも間を置いた。秒針だけが音を響かせる。しかし、綾人には別の音も聞こえた。小さく、胸の鼓動の音が響いた。

「あんた一体何を……」

「」両親は病死ではありません。父親は殺され、母親は自殺してい

ます「

医者の言葉の瞬間。綾人の視界にカメラのシャッターが切られるようすに刹那に暗闇が映つた。刹那に視界は病室に戻る。

「いきなり、何を言つんだ。くだらない。長い付き合いのあんたが何を言つんだ。両親は癌で死んだ」

無意識の内で終つた視界の変化は、無意識ゆえに気が付かない。綾人は医者の言葉を切つて捨てた。あまりにも突拍子がなさすぎる。溜息を吐くと、ベットに寄りかかった。これが危険を伴う治療？荒唐無稽もいいところだ。

「そうですね。少し突然すぎたかもしません。ではこれをご覧下さい」

医者は綾人に書類を手渡そうとした。しかし綾人は手を伸ばさない。くだらなすぎて付き合いきれないからだ。

「南さん。非抵抗でお願いします」

確かに誓いを立てた。諦め半分、半分あきれるように書類を手に取る。表紙には「南綾人診療カルテ其之一」と書かれている。数十枚に及ぶ書類の中にいくつかの付箋が貼られていた。一つ目の付箋を開く。

同患者達の目の前で起きた母親による父親の殺害と自殺は……

突如、胸の鼓動が大きく響く。秒針の音よりも大きい。また、刹那に暗闇が映つた。

「やれやれ。こんな手のこんだ資料を見せてどうするつもりだ？」

当然、綾人は医者の言葉など信じていない。こんなカルテ等、簡単に偽装・改竄できる。そう思い、何枚かページを開いた。次の付箋は新聞記事の切れはしだ。

江戸川区で夫婦が心中 残された子供達は無傷

また、胸の鼓動が鳴つた。先程よりも強く。それは高鳴るという意味でなく、大きく回数ごとに響く音だ。同時に綾人の視界を瞬時に暗闇が包んだ。

己の鼓動と視界の変化に戸惑うように頭を振る。視界はすぐ戻る。新聞記事を改めて読み直す。疑心暗鬼になりつつ、呆れながら読みづけた。しかし読みながら疑心はどんどん消えていく。一分も満たぬ内に、疑心よりも集中が上回る。むさぼるように、新聞記事を読む。

事件が起きた年月 両親が病死した同日。

場所 綾人が昔住んでいた場所。

心中した夫婦の名前 それは病死した両親の名前だった。

残された子供達 小さく、綾人の名前が刻まれていた。

こめかみに鈍痛が襲う。入院以来、初めての鈍痛だった。

病室に、秒針の音色だけが、静かに響き続けた。

綾人の視界を暗闇が包んでいった。

## 第十八話 Identity Crisis <自我、崩壊

綾人。母さんもう疲れたの

何を言つてるの？

＊＊。母さんもう疲れちゃったの

何を言つてるの？

弱い母さんを許してね、仲良く生きるんだよ

何を言つてるの？

「南さん」

綾人に鈍痛が始まると同時に、意識を暗闇が包んでいた。片手でこめかみを抑え、目を閉じていた。医者の言葉で目を開けた。驚愕の表情を浮かべる。

「俺は今……意識を失つてたのか？」

医者はゆっくりと頷く。綾人は意識を失つた事に驚愕しているが、反して医者の表情は至つて冷静だつた。

「私の声が届かなくなつて一分程でしょうか。恐らく、今、抑圧された記憶を呼び起こそうと脳が作用したのでしょうか。フラッシュバックと呼ばれるものです。しかし、これらはおかしな事では決してありません。抑圧された記憶とは、抑圧せざるをえない記憶と同義です。自己を守る為に脳が防衛を選択した。それだけです」

綾人の目を閉じた瞼の内側で、激しく眼球が動いていたのを医者は見ていた。この行動は“夢”を見ている時にしばしば起る。

「嘘、だ。両親は、癌で死んだ」

綾人の言葉が覚束ない。肩が小刻みに震え、脂汗を浮かべ始めている。驚愕の表情には別の感情が見え始めていた。

「幼い心で死を想起させる為に癌ですか。興味深い防衛ではありますか」

静かに眼鏡をかけ直す。間のせいで秒針が綾人の耳には痛い。

「老齢でもない夫婦が同時に癌で死ぬ確率とはどれくらいでしょうか」

綾人の表情には別の感情が驚愕を塗り潰していく。肩をさらに震わせる。当然、寒さからくる震えではない。別の感情 恐怖である。

「南さん。父の死に様を貴方は見たはずだ」

医者の言葉が、秒針の音色と共に綾人に恐怖を刻む。

「違う……。父さんと母さんは癌で……」

認める訳にはいかない。抑圧記憶であろうが、意識喪失の中で聞こえた母の声だろうが、絶対に認める訳にはいかない。綾人は本能で医者の言葉を否定した。綾人自身は認めない理由を把握していない。本能が拒否反応を示したのだ。

何故ならば記憶とは己を保持する為に必須の存在だからだ。ただの記憶違い程度のレベルではない。記憶の改竄が己の中で起っている事を認めるという事は、己の歩んだ人生に疑いを持つ事になる。

人生に疑い　自我への疑い。

つまりは自我崩壊の危険性を伴うのだ。ゆえに本能が恐怖によつて否定した。

「父親は母親に隠れ浮氣をしていた。逆上した母親は包丁で父親を刺し、生きたまま目玉をくり抜いた。貴方達が泣き叫ぶ、その目の前で」

医者の言葉は確実な衝撃を持つとして綾人の脳に届く。

「黙れええつ……」

本能は雄叫びと化し、病室に響いた。

「真実です。思い出しなさい、己の底なる記憶を」

そう言つと医者は両の手を強く叩いた。乾いた音と、秒針の音色が同調する。同時に、綾人の本能による否定も空しく

こめかみを鈍痛が襲う。暗闇が綾人を包んでいった。

おい、その包丁はなんだ

ワタシ見タノ

なんだその喋り方は。いいからその包丁を渡しなさい

ワタシ見タノ。アナタガ、ワカイ女ト、キスシタトコヲ

な、何を言つてるんだ！綾人も\*\*もいるんだぞ！馬鹿な事は  
止めなさい！

アナタ。ワタシヲ、ソノ目<sup>ヂ</sup>、見ナイ<sup>ヂ</sup>。ワカイ女<sup>ニ</sup>、イロ目<sup>ヲ</sup>  
ツカツタ目<sup>ヂ</sup>、ワタシヲ見ナイ<sup>ヂ</sup>

止めなさい！止め……

鮮血が、暗闇を塗り潰していく。

意識は回帰する。静かに綾人は目を開いた。

「思い出したようですね」

表情に恐怖は映し出されていない。表情からは生気が失われていた。脂汗は温度を落とし、冷汗と変化している。

両親の死は、確かに綾人の目の前で起つた現実。母は父の瞳を包丁で割り抜き、動かなくなつた父の体を何度も刺した。

「それはよかつた。第一段階成功です」

医者の言葉に、綾人は先ほどから何の反応も示さない。心と体が動こうとしなかつた。

「南さんの母は何らかの精神の疾患を抱えていたのでしょう。二十年以上前の精神療法では効果が見られなかつた。それが悲劇の真相でしそうね」

追い打ちをかけるように、非情な現実を語つた。

「あなたの目的は何だ。何故、こんな事を思い出させる

生氣の無い、弱々しい声だつた。しかし、当然の反論だつた。鈍痛と両親の死の関連性が見出せない。抑圧された記憶。それはあまり

にも残酷な記憶だった。このまま抑圧されていたままでも良かつたはずだ。

「南さん。目的は貴方の自我の“再構築”です。」

医者はそう言うと静かに銀色の置時計を止めた。そして綾人の正面に立つ。

「全ての目的は鈍痛の根治。そして貴方は私に誓つた。鈍痛の根治の為には柑菜さん以外の全てを厭わないと」

全てを厭わない リスクを承知すると同義だ。そしてリスク、その意味とは、自我崩壊であつた。自我の再構築を最短で行う。それには一度、崩壊させ、再構築を行う。失敗は自我の崩壊を意味する。それは人として生きてはいるが、ただ“生きているだけ”という事だ。

「断つておきますが、これはあくまでも第一段階。ゆえにリスクは治療計画の中でも最少のレベルです」

これが、最少のレベル？異論も否定の言葉も綾人からは出ない。否、出せなかつた。

「南さん。貴方の脳は本当に便利だ」

その言葉に神経が反応する。反射するように声を上げた。

「俺の前で奴の言葉を真似るなー」

そう。鷹司も同じ言葉を使つていた。

「わからないんですか。鷹司さんの言った意味が」

「なんだと?」

「それはいすれ。明日は、柑菜さんのお話でもしましょうか。お疲れ様でした」

そつ言つと医者は病室を出た。

残された綾人の額から冷汗が流れていった。

## 第十九話 三者、それぞれの思惑

一日目の治療が終つた夕刻。夕陽の照らす、綾人の病室の扉が開かれた。客人は轟だった。綾人のベットの横にまで行くと愛用のハットと茶のコートを脱ぐ。綾人はリモコンを片手にテレビを見ていた。画面に集中しているのか、轟が来たというのに何の反応も見せない。

……江戸川区で起きた連續猟奇殺人の犯人は、未だ逃走中です。警察は増員を決定し、連日捜査を続けておりますが、未だ犯人に繋がる有力な情報は見つかっていない模様で……

「この三日はしつかり休めと言つたろ？」

そう言つと轟は綾人の手からリモコンを取り、テレビの電源を落とした。しかし綾人は未だ何の反応も示さない。視線は、何も映つてないテレビに向かれたままだ。轟は不審に思い、綾人を注意深く見た。綾人の視線 テレビを見ていない。視線は中空を捉え、ただ、目を開いているだけに近かつた。

「おい、小僧。聞いてんのか？」

轟は綾人の肩をつかみ、体をゆする。さすがに、綾人も反応を示した。

「え。ああ、轟さんじゃないですか。柑菜は？」

まるで幽鬼の様に、生氣のない言葉だった。表情にも疲労の色が濃く表れている。それでも柑菜の事を質問していた。

「柑菜ちゃんは自宅に送った。部下一人を残してきたから何かあつたら連絡があるさ」

綾人は目覚めた当日に柑菜の護衛を轟に頼んでいた。鷹司の目的は綾人に変わり柑菜を愛する事。それがどういう行為で、どんな形に出るまでは把握できていなか、確実に綾人が柑菜に接触を試みるだろう。

その論理では、綾人の意識の戻らない七日間に、柑菜に接触する絶好の好機を見逃すという矛盾が生まれる。矛盾の答えは、綾人をより絶望させる為だろう。意識のない間に柑菜を奪つても、当然、綾人は絶望する。だが、綾人が快調時に柑菜を奪う絶望とは質が違う。再び、自分の無力さを痛感させ、誰が柑菜に相応しいのかを示すことが目的のはずだ。

今回は鷹司の狂気に救われた。一人はそう結論し、綾人の目覚めから一十四時間体制で警戒をしていた。

「そうですか。柑菜に会いたいな」

轟は思慮を巡らせる。綾人の体調が昨日よりも確実に悪化している。悪化理由 決まつている。医者の治療の結果だ。再び轟は綾人の肩を掴む。今度は両手で。

「おい、小僧。カウンセリング内容を全て聞かせろ」

綾人は治療内容を事細かに轟に伝えた。抑圧された記憶。その想起を。

「轟さん、どうやら俺の頭はまたイカレちまつたらしい。両親の死。

あれを病死だと思つてました

治療内容を伝え終えると、綾人は小さく笑つた。表情 自嘲だ。

「その事か……」

轟は椅子を取り出し、深い口元の皺を擦る。不精髭が擦れる音が鳴る。

「俺にも責任の一端はある。おめえの記憶の変化を放置した責任が」

「ちつ……あの野郎。下手に時間制限引えたのは逆効果か

轟は瞬時に医者の治療計画を読んだ。長期の治療から短期のリスクの大きい治療に切り替えた事を。轟の心にふつふつと、怒りが込み上げてきた。勢いよく立ち上がり、病室から出ようとした。

「待つて下さい、俺は、大丈夫ですから」

言葉に生氣は感じられない。だが、極度の体調不良の中でも、轟が治療を止めようとしている事は察した。

「俺にハツタリかますのは百年早えよ」

轟は背を向けたまま鼻で笑つた。綾人が強がっているのは誰が見てもわかる。

「頼みます、俺はこの鈍痛を消したいんだ」

それでも綾人は食い下がる。それほど意志が固い。轟は振り向き答える。

「馬鹿言つな。その結果がこの現状じゃねえか」

少し言葉を強めた。綾人の固い意志はわかる。長年苦しんだ鈍痛を根治する可能性があるのならば、それに賭けたい。鷹司の七年ぶりの出現に全快で捜査に取り組みたい。轟はそれら全てを把握しているが、綾人の現状を見れば看過することは出来ない。轟は背を向き、病室の扉に手をかけた。

「轟さん！」

綾人の言葉が強められた。最悪の体調の中、必死に振り絞った言葉に轟は振り向いた。

「俺を、あなたの息子を、信じて下さい」

表情には相変わらず疲労の色が濃いが、それでも言葉に凜々しい強さを感じた。瞳　淀みのない澄んだ瞳た。

「生意気言つよつになつたじゃねえか」

轟は綾人の瞳を見て、ベットの椅子に座つた。

「俺から、一つだけ助言をくれてやる

轟の瞳もまた、強い意志を放つている。

「いつか、この世はてめえの思う色に染まるつて言つたろ。だがな、染め上げた色が白であれ、黒であれ、その色をどう捉えるかもてめえ次第だ」

綾人は轟から視線を逸らさない。

「例え、白に染めたはずが、メッキが剥がれ黒が見えてこよつとも。黒を悪と捉えるな。全てはてめえ次第だぞ」

そう言つと、轟は立ち上がる。

「いいか。これはてめえの人生だ。てめえで決断した意思なら、俺がとやかく言つ問題じやねえ。けどな」

言葉と共に背を向き、扉の前へ進む。扉に手をかけて、振り返る事なく言葉を続けた。

「親にとつて、子供つてのはいつまで経つても子供なんだ。忘れんな」

扉は開かれ、轟は退出した。振り向く事なく。綾人の心に強く刻み込む言葉を残して。

轟は「一トを羽織りながら、廊下を歩く。廊下には淡い夕日が差し込んでおり、情緒的な雰囲気を醸し出していた。出口付近まで行くと、曲がり角から医者が歩いてきた為、足を止めた。医者も轟に気が付き足を止める。

「小僧から頼まれた。止めてくれるなと」

轟の表情には綾人と話していた時の暖かみは一切ない。言葉、表情共に、重みが発せられている。

「ほう。奇遇ですね。私も頼まれましたよ。その為には全てを厭わない今まで言されました」

対して医者は相変わらず、飄々としていた。轟の重みなど、気がついてはいるが一切、介さない。

「小僧の奴。いつの間にか漢の顔してやがった」

轟は綾人の強い意志が籠つた瞳を思い出し小さく笑う。それを悟られないのか、ハットを深くかぶる。

「だがな、小僧に何かあつたら俺はてめえを地獄に叩き落とす」

ハットの下から、轟の鋭い眼光が医者を貫いた。

「彼はいつまでも子供のままですね。オシメも取れないとは

それでも、医者は微塵も揺るがない。皮肉混じりに返答した。長年の刑事生活で培われた轟の威圧と眼光は、普通の人間ならば怯み上がる程の迫力がある。しかし、医者の自身が持つ信念を揺るがす事は不可能に近い。

「ガキの尻拭きも親の役目や」

当然、轟は医者の固い信念は知っている。だが、捨てては置けない。脅しと威圧で、僅かにでも医者にブレークがかかれればいいと思つていた。

「一つ、わかっているとは思つが忠告してやる」

言葉と共に轟の威圧は消えた。変貌するかの様に。

「催眠状態の患者の記憶を解放するには充分気をつけるんだな。その記憶に誤った色で染めたら元も子もねえ」

医者は衝撃を受けた。轟の変貌ぶりにではなく、轟の忠告内容に。

「……当然です。」

医者の心中 不可思議だ。恐らく轟は、綾人からカウンセリング内容と両親の死の想起を聞いたのだろう。だが、それだけでの治療に“催眠”を用いたのを察したのか？催眠の“種”が理解できたとでもいつのか。さらに驚くべきは“催眠”の懸念事項も把握している事。医療知識のない男のわかる事ではないはずだ。

「残り、一日だ。小僧にとつて、俺にとつての一番の結果を示せ」

「言われるまでもありませんよ、といひで」

医者は言葉と共に全神経を轟の拳動に集中した。そして核心を探る為、質問した。

「何故、催眠の知識があるのですか？」

轟という男は古い男だ。家電の扱いすらままたらない男である。その男が催眠の深い知識を知っている。どう考へても不可思議な事象だ。

人が嘘をつくには何らかの挙動に表す。不自然に目を合わす、逸らす。目線が左上に流れれば確定に近い。その他にも様々な、僅かな挙動が起きるはずだ。深い知識と、長年の経験がある医者は嘘を見抜く事に長けている。しかし、勝算は限りなく低い。

「テレビに決まってんだろ？」「

全神経を集中した結果　　何も、読めない。視線、手足の挙動、表情のどれを取つても、不自然さを発見する事はできなかつた。医者の鋭い洞察力を以てしても、相手が轟では通用しなかつた。

轟は言葉を終えると、謎を残したまま、医者を通り過ぎ、出口へ向かつていつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9193e/>

---

愛しているから、苦しめたい

2010年12月9日06時08分発行